法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

戦傷のメディア・エスノグラフィ : 行間を読み取る過程についての一考察 : 事例研究 佐世保釜墓地戦没者追悼式

BEPPU, Minako / 別府, 三奈子

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
66
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
41
(発行年 / Year)
2019-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00022342

戦傷のメディア・エスノグラフィ：
行間を読み取る過程についての一考察

事例研究　佐世保釜墓地戦没者追悼式

別　府　三奈子

はじめに：記録の形骸化と記憶の変質

今日，日本が繰り広げたアジア・太平洋地域での戦争において，どのようなことが起こったのかを知ることの困難が加速している。公的記録を担う報道機関が頼る体験の証言者の多くが，鬼籍に入りつつある。日本の各地で続けられていた，語り部と呼ばれる市井の人びとの声が途切れる。体験した人びとの無言の意志の表れであった寄付金が減り，民間個人の資料館が次々と閉じられる。戦後の出版界の一角にあった戦記物の購読者がいなくなる。一方で，近隣諸国との認識のずれは，戦時性暴力や徴用工の訴訟問題といった例を出すまでもなく，現実の問題となって今も現れている。

直接体験を共有できる社会と，直接には体験を聞くことができない社会。その移行の末期に，日本はある。直接体験のある人と接する機会がない場合，人びとの体験を伝えるものは，やがて長期保存に耐えうる記録だけとなる。その主だったところは，保存され維持されている戦跡や慰霊の場，記念館や博物館，マスメディアによる記録などになる。移行期の今，戦没者について記録され伝えられる場の前線で何が起きているのか。本論文は，その観察記録と分析・考察を，一つの事例から試みる。扱う事例は，「佐世保釜墓地追悼式」である。

・記録の定着と消去

筆者は，社会的な出来事のなかで，どのような側面が公的な情報空間の中で封印や消去されやすく，どのような人がどうやって，出来事の封印や消去を防いだのかについて，グローバル・ジャーナリズムの考え方と歩みを解析してきた。2001年に大分県に赴任したことがきっかけとなり，検証事例としてアジア・太平洋地域で戦争の痕跡が残されている場所の現地調査を始めた。日本国内とアジア諸国の間で，歴史的な認識の乖離をめぐり，摩擦が強くなっていた。

2006年には，それまでの５年間に現地を訪れたアジア各地の約200か所の戦跡調査を踏まえ，『アジアでどんな戦争があったのか　戦跡をめぐる旅』（めこん，2006年）にまとめた。これは，戦争を伝える場となっている遺跡や記念館などで，どのような出来事を，どのような表現方法で固定しているのかに注目し，場の語りをひたすらに書き写す作業で構成した。調査では，証言者の記録映像もさることながら，当時の現場を捉えたと評されている写真の力が，功罪含めてとても強いことを実感した。

戦跡調査を続ける中で，戦争における出来事には，記録が継承されやすいものから消滅しやすいものまであり，時代や国籍に関係なく，ほぼ類型化できると考えられるようになった[1]。そこで2009年の小論文では，前者を記録の定着，後者を記録の消去，として，戦跡における記録の６類型を，以下のように分類した[2]。

定着１．国家の主張。定着２．小集団の信条。定着３．個人の追慕。消去１．物理的消滅。消去２．権力による抹殺。消去３．自主的沈黙。

記録の継承に関する傾向性をパターン化して捉えようとする理由は，記者教育法の開発を視野に入れていることによる。今日の日本における強力な記者クラブ制の中では，記者が見聞しやすいものの量的な偏りが大きいことから，報道機関が政治的な力や経済的な力の強い者の主張を拡散するスピーカーになりやすい。

人びとの判断材料をより幅広く，より公平に提供するためには，何を確認しどのように記録すべきか，を考える力が必要となる。記者はどこでどう踏みとどまる必要があるのか。欧米でよくいわれる「一線を画す」ために，どのようなニュースバリューを持つ必要があるのか。社益と国益を，記者のひとりひとりが自立・自律して乗り越えるためには，具体的な検証研究に基づく論理的な理解が必要である。

筆者はその後，戦跡フィールド調査と並行して，ベトナム戦争報道における日米政府介入事例の検証や，戦前で最大となった新聞筆禍事件（大阪朝日新聞白虹事件，1918年）の原因や背景についての検証などを重ね，2012年に何が消滅しやすいのかを視覚的に捉えるための概念図の作成を試みた。戦跡に関する前述の類型化を応用した「ジャーナリズム・記録・記憶の相関モデル」としての図式化試案である[3]（**図１参照**）。

これらの検討のなかで，欧米のジャーナリズム界と日本の報道業界の価値基準に，かなり開きがあることがはっきりしてきた。そこでここ数年は，日本の報道について意識して観察を続けている。消毒映像，客観報道，自主規制，放送局の政府による免許制，記者クラブ制度，新聞の再販制，編集権と人事権が経営陣に集中する企業形態，報道企業の経営陣と政府要人との会食，終身雇用や年功序列といった企業文化など，さまざまな日本の報道業界独自の仕組みがある。その結果として，世界最大の発行部数を有する新聞大国となってきた。ものによっては戦前から続くこれらの慣習が，何を生み出し何を封印しやすいのか。欧米とは異なる仕組みの解明が，本研究全体の目的である。

---

[1] 類型化にいたるフレームについては，日本民間放送連盟が発行している『月刊　民放』編集部からの依頼で「８月ジャーナリズム」特集用に書いた拙稿『弱肉強食の「歴史」を超える』（2006年８月号，18-21頁）なども参照のこと。

[2] 拙著「ジャーナリズムと映像表現　昭和／消去の類型」『マス・コミュニケーション研究』（76号，2010年，43-67頁）

[3] 拙著「ベトナム戦争の樹」『放送番組で読み解く社会的記憶　ジャーナリズム・リテラシー教育への活用』早稲田大学ジャーナリズム教育研究所・公益財団法人　放送番組センター共編，紀伊国屋書店，2012年，205-250頁。図は，219頁。

描かれていないもの，封印されつつあるもの，消去されたもの，こういった研究対象を理解していくために，研究方法の試行錯誤も続いている。戦争で傷を負う側の出来事を事例として，必要な検証手続きを重ねているが，研究方法は戦傷のメディア・エスノグラフィと呼ばざるをえないような作業となってきている。方法論をめぐる国際的な検討については，別紙にて先行研究分析を含めた詳細な報告を予定している。

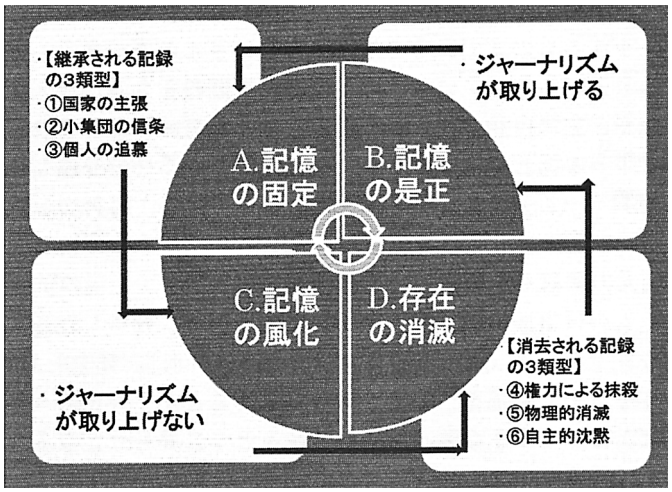


図１　「ジャーナリズム・記録・記憶の相関モデル　別府試案2012年」

・本稿の射程

国家と国家が武力で勝敗を決める戦争では，人殺しが戦果となる。その非日常のなかで，生身の人間は戦闘員も非戦闘員も，さまざまな出来事に直面する。災難でない場合もあるが，深く傷つき，長く苦しむ体験が広範囲にわたって多種多様に起こる。人によっては，複合的に負荷がかかってしまう。そういった体験の蓄積を忘れて，あるいは，なかったことにしてしまうと，再発するという懸念には合理性がある。こういった理由でジャーナリズムは，戦争の記録に積極的に関わってきた。

本稿は，上述図１の試案のなかの「D.存在の消滅」の典型例である，との仮説を筆者が立てた事例「第38回　佐世保釜墓地戦没者慰霊式（2019年５月12日）」について，記したものである。結果としては仮説と異なり，「B.記憶の是正」について「Ｂ.記憶の変質（是正・形骸化・捏造）」というような加筆修正が必要と思われる。いくつかの事例を重ねて，さらに検討する予定である。

なお，論旨を展開する上で必要な情報が多いので，論旨のアウトラインを本文で述べ，それを支えている根拠は，後述の「資料１　新美彰さん年表」「資料２　『アサヒカメラ』1965年８月号特集」「資料３　ルソン戦に関連した慰霊の場」として別添えする記述方法をとる。「資料４　ルソン島北部決戦に関する記録本」は，本文で述べた時代背景と関連づけて考察対象とした書籍群で，参考文献とほぼ重なる。参考文献は，従来であれば著者名のあいうえお順で記載するが，重複記述をさけるため，これに統合した。

１．釜墓地調査のきっかけとなった彫像

2019年５月12日に，佐世保市で第38回佐世保釜墓地戦没者追悼式が開催された[4]。釜墓地と追悼式について，長崎県のホームページに次のようなプレスリリースが掲載されていた。

『長崎県プレスリリース４月26日 HP より抜粋

・担当課：原爆被爆者援護課，担当者（山口，飛田），直通　095-895-2427（内戦：4989）

・参列者は約300名，主催者は佐世保釜墓地戦没者追悼式実行委員会会長　宮内　雪夫

・式典は１時間13分の予定，開会前の10時から海上自衛隊佐世保音楽隊による追悼演奏

・追悼のことば(県知事〈代読　上田副知事〉，佐世保市長，県選出国会議員，佐世保東翔高生徒代表，遺族代表)

＜釜墓地とは＞　　昭和24年１月，佐世保市の浦頭港に入港の引揚船「ぼごた丸」で，フィリピン等の収容所から帰還された軍人軍属の遺体4,515体，遺骨307柱と，「ぼごた丸」で帰国途中に，あるいは近くの南風崎駅などで待機中に亡くなった方々の合計6,800余柱を祀る墓地。その御霊の出身地は全国に及ぶ。

＜慰霊祭の開催＞　　帰還した遺体を昭和24年に地元江上地区の篤志が荼毘に付し供養。その後，昭和55年から宮内会長が理事長を務める「長崎博愛会」が墓地の清掃・供養を開始し，昭和57年に「釜無名戦士墓地護持会」を結成し，同年８月に第１回慰霊祭を開催。平成26年からは県・佐世保市も後援し，名称も追悼式に変更された。また，平成27年からは佐世保釜墓地戦没者護持会・県・佐世保市の３者で構成する「佐世保釜墓地戦没者追悼式実行委員会」が開催することとなった。』[5]

筆者は，前日の追悼式準備から当日の撤収まで，現地に滞在させていただいた。追悼式に参列しながら場の観察をすることになったきっかけは，彫像「母さん立ち上がって」と「神様助けて」が，この釜墓地の一角にある如比堂に奉納されていたからだった。この彫像は，太平洋戦争末期にルソン島マニラに住んでいた民間邦人として著名な新美彰（にいみ・あや）さんが，戦後に製作したものだった（新美さんについては，**資料１**の年表を参照）。

ルソン島北部は，1944年10月の特攻作戦以後，陸海空すべての兵器を特攻作戦に投入し，その後は兵士の肉体をもって斬り込む特攻作戦が，食料・武器一切の補給がないままに続けられた激戦地である。数千人の民間邦人の母子たちは45年3月のマニラ陥落後，ルソン島北部山岳地帯にこも

---

[4] 正式名称は旧字体を使用した戦歿者となっており，新聞表記は会社によって新旧いずれかの表記を使用している。本稿では戦没者と表記し，釜墓地追悼式，あるいは，追悼式と略す。

[5] 佐世保引揚援護局と釜墓地についての基礎資料は，次のものを使用している。『佐世保引揚援護局史　上巻・下巻』　編集　佐世保引揚援護局情報係，1951年３月31日，佐世保引揚援護局発行（復刻版　ゆまに書房　2001年５月）。『慟哭の釜墓地』社団法人・佐世保釜墓地戦没者護持会，1989年12月発行。『佐世保釜墓地戦没者（比島・南方島）　昭和20年（1945）から平成28年（2016）　年表』一般社団法人　佐世保釜墓地戦没者護持会，2016年発行。

っての持久戦となった日本軍のあとを追い，3000メートル級の山岳地帯を目指して移動を続けた。45年６月から９月まで，戦闘員・非戦闘員入り混じって，餓死・病死・自死する極めて凄惨な戦場となった。弱った兵士が捕虜となって敵のスパイになることを防ぐための病院における（絶命）処置，戦闘員による現地住民や果ては邦人婦女子に及ぶ略奪，飢餓の末路としての人肉食など，戦禍で見聞する混乱が複合的に起きている。フィリピン全土でみれば現地住民100万人，邦人50万人ともいわれる戦死者を出している。ルソン島北部決戦では，各部隊の生存率は１割から３割程度と致死率の高さも特徴となっている。太平洋戦争中の戦没者は，中国大陸に次ぐ多さだが，発生した期間の短さを考慮すれば，極限が集中したことが察せられる。

さらに特筆すべきは，陸の特攻総力戦になったルソン北部決戦の知名度の低さにある。硫黄島の兵士玉砕，サイパンの住民玉砕，沖縄の住民集団自決，中国・朝鮮半島での暴行や残留孤児問題といった，戦争の惨事が起きたことで名高い場での出来事のあらかたが，1945年のルソン島で大規模に発生している。しかし，そのことを戦争体験のない世代の多くが知らない。筆者の研究テーマである，情報の消滅・消去・封印・瓦解の仕組みを解明するにあたって扱う必然性が高い事例である。

１－１．新美彰（にいみ・あや）さん

筆者にとって釜墓地調査のきっかけとなった彫像の制作者・新美彰さんは，ルソン島北部決戦の証言者として著名である。ルソン島での体験に関する書籍は６冊を数え，その他にも造形物，音楽，講演，ビデオ作品など，さまざまな表現活動を通して，戦争の恐ろしさを訴え続けた（**資料１**の年表のアンダーライン部分が著作）。

筆者が新美さんの存在に気付いたのは，ルソン島北部決戦全体の報道検証をするきっかけとなった法政大学元総長・故阿利莫二氏の著書『ルソン戦―死の谷』（岩波新書，1987，104頁）での記述による。本書は，ルソン島北部決戦に学徒出陣の見習い士官として動員された阿利氏がかろうじて生還した後，42年間を経て自らの体験を記録したものである。当時もっとも気の毒に思ったのが，現地民，邦人婦女子，高砂族の少年軍属だった，と記されている（同書，102頁）。ルソン島北部決戦において，邦人母子が自らの体験を証言記録として語り遺せた例はごくわずかである。邦人母子の多くは，戦場での物理的消去によって語る体を持たず，かろうじて生還した人びとは自主的沈黙を強いられ，あるいは選び，語る声をもたなかった。**資料４**の記録本の著者も，圧倒的に男性である。兵士は男性だが，従軍看護婦や移住していた民間婦女子もたくさんいた。外地からの引揚者全体でみても約600万人の半数は民間人で，女性や子供が大勢いた。

ここで，新美彰さんと一人娘順子ちゃんの足跡を簡単に辿っておこう。新美さんは，強姦・不法妊娠・自然処置といった，45年から46年に外地の邦人女性を襲った惨事には遭遇していない。しかし，まさに生死は紙一重だった。戦禍が幾重にも集中した若い民間女性の引揚にいたる体験は，釜墓地に合葬された人びとの体験に隣接している。新美さんは，釜墓地に帰還したご遺体の代弁ができる数少ない証言者とみなすことができる。

新美さんは，43年５月にマニラの日本企業にタイピストとして行き，駐在している日本人と結

婚した。44年７月には女児を出産したが，秋には夫が現地召集される。戦況の悪化によって帰国できず，45年１月から北部ボンハルで集団生活を数か月するが，すでに食糧難は深刻だった。日本軍司令部の後退にともない，ルソン島北部山岳地帯への移動が領事館から伝えられ，度々自力で移動することになる。その途上の８月７日前後に，１歳になったばかりの一人娘を飢餓で失った。９月上旬に米軍に投降し，10月末にカンルバン捕虜収容所から鹿児島に帰還している。その後，2002年に最後の絵本を出版するまで，新美さんは書籍，尺八，彫像，絵画，絵本，ショートムービー，講演と，あらゆる手段を捉えて，娘さんが腕の中で餓死していったルソン島北部の体験を語り続けた。

筆者は本年４月，釜墓地に新美さんの彫像が奉納されていることに気づき，５月に追悼式があることから急に現地訪問した。訪問に先立って，故人となっている新美さんに彫像の奉納を呼びかけたという河口雅子さんを探し，聞き取りと追悼式参加の同行をお願いした。地元で長年月刊の文芸誌『虹』を発行している九州公論社の編集と発行を担ってきた人である。夫の故河口健三氏は戦時中に同盟通信記者であり，戦後にミニコミ誌を発刊し，編集長として釜墓地のことも継続して記事にしてきた。

佐世保で筆者は，河口さんを介して，開催準備責任者の（社）佐世保釜墓地戦没者護持会事務担当・栗元克也氏，護持会会長・宮内雪夫氏，当日取材に入っていた映像プロデューサー・西山恵子氏（NHKのフィリピン戦に関するドキュメンタリーを作成中。株式会社ノマドのコンテンツ制作事業部部長），本仏寺の大木住職，参列しているご遺族の池田礼子さん・めぐみさん母子，元長崎新聞佐世保支社長の堀昭さんほかの皆さんとあいさつし，あるいは，短い聞き取りを行った。近くにある佐世保引揚記念館では管理している米田静雄さんに，南風崎駅では鈴田商店の皆さんに聞き取りなどを重ねた。フィールドノーツの詳細は別紙に譲り，ここでは追悼式の場に立つことで気づいた違和感のポイントを整理し，考察のアウトラインへと記述を進める。

１－２．彫像の意味

現在，釜墓地に合葬された人びとの体験を伝える場はほとんどない。本仏寺に数枚のパネルと，年表や冊子があるが，いずれも釜墓地の経緯で，合葬された人びとの体験ではない。ご遺体で日本に帰還しており，フィリピンの戦いを生きて語り継ぐ人のいない墓地である。そこで唯一の手掛かりとなるのが，如比堂に奉納されている二つの彫像である。いきさつをみてみよう（出典：月刊文芸誌『虹』河口雅子さんへの聞き取り，護持会の栗元事務局長への聞き取り，釜墓地 HP などより，情報整理）

如比堂

如比堂が完成し除幕式を行ったのは，1989年５月30日である。「如日堂」と命名したのは河口雅子さんで，その意味は，フィリピン戦の真実を伝える，とのことだった。彫像が奉納されたきっかけは，マニラ会の堀田正一氏から河口さんが，フィリピンゆかりの彫刻家を紹介され，「ルソン島を逃亡放浪し死線をさまよう母子と原住民との群像

の存在を教えられた」ことによる[6]。

河口さんが取材で阿蘇山麓の工房を訪ねたとき，工房の窓の外の軒下に大きな像が野ざらしになっていた。理由を聞くと4体で一つの像なのだが，半分は読売新聞社の入り口にあり，こちらは大きすぎて入らないのでここにある，とのことだった。後日，新美さんは読売新聞社から彫像の半分を返してもらい，「神様助けて」とともに4体揃えての釜墓地への奉納を，河口さんに伝えてきたという。新美さんが初めて作った観音像も合わせて，河口さんたちが車を手配して運んだという。奉納された作品についてみてみよう（資料写真の撮影は，会田法行氏）。

「母さん立ち上がって」

「神様助けて」

・「母さん立ち上がって」

4体からなるこの彫像は，ルソン島北部山岳地帯で命が尽きようとしている邦人母子をモチーフとしている。力つきて歩けなくなった母親が，まだ歩ける息子をなんとか生かそうとしている。息子が皆とはぐれないために，足手まといの自分を殺してくれと母親が息子に頼む。息子は，母さん立ち上がってくれと頼む。鳥の足のように細った手足で目玉がぎょろついた母子像である。そばでイゴロット族の青年がバナナを差し出そうとしている。青年の腕には，邦人女性の乳児が抱っこされている。新美さんは，イゴロットの人びとが日本軍に散々な目にあわされながら，自分たちを殺そうとしなかったとたびたび書いている。亡くなった母親から子供は離れない。そこここに母子の亡骸があったという。

別の生還した衛生兵の体験記録に，乳児を拾い，難所をぬけたところで使役していた原住民に預けた，といったエピソードがでてくる。中国大陸戦線でいうところの残留孤児にあたる。赤子は，亡くなった母親の胸にしゃぶりついていた。亡くなって間もない母親の乳房がちぎれ，赤子は吸血鬼のように血を吸い，顔も服も血だらけで仰天した，という。同じ書の中に，見聞として母親がわ

[6]『虹』1989年4月号，55頁

ざところんで抱きかかえている乳児を窒息死させたり，足をすべらせたふりをして幼児を谷底に投げ落としたりしたという。それも一度や二度でなく。大人ひとりでも生き延びることが至難の極限で，母親がそこまで追い込まれる。人間が人間を襲って食するほかに，生き延びる方法がないほどの極致で，起きて当然の出来事と察せられる。別の難所では，乳児を含む３人の母親が，兵隊に向かって乳児を掲げ，兵隊さんこの子を殺して！と，叫んでせまってくる。両手で二人の歩ける幼児の手を引きながら山越えをする。幼子３人のうち２人を生かすために，１人を手放すしかないと決意した母親の姿だった[7]。

・「神様助けて」

釜墓地に奉納されている新美さんの大きな彫像は，もう一体ある。「神様助けて」である。栄養失調末期と思われる幼児が，立っている母親の足元にすがりついている。母親は両手を合わせて天を仰いでいる。上述のようなエピソードを何度か目にするようになるまで，単純にその像は，私たちを助けてください，という母親の祈りを意味していると思っていたが，違うのだった。神様，この子をなんとかしてください，私はもう面倒を見られません，私をひとりにしてください，と祈る母親の姿だった。新美さん自身，キアンガン手前の急峻な崖っぷちで，この子がいなければもっと草をとれるのに，と思った自分を，戦後ずっと責め続けた。様々な理由で母親が自分を責めた戦禍であり，戦後の歩みがあった。たくさんの想いを込めた祈りの像だった。

１－３．釜墓地に合葬された人びと

釜墓地の遺骨やご遺体となった人びとの体験を，さらに探してみる。例えば，自ら語る力を持たない子供の体験は，軍医や衛生兵，看護婦の手になる書籍にごくわずかな手がかりが残されている。何冊かは後に体験者たちの著書に引用されることが多く，信ぴょう性が高い。

例えば，軍医として１年間フィリピン戦に従軍したのち，捕虜医師としてモンテンルパとカンルバンに勤務した守屋正氏は，当時の収容所内の病院について詳細に記録しており，類書が見当たらない[8]。敗戦直後のもっとも混乱を極めた時期に，フィリピン最大の収容所カンルバンの病院長だったテオドル・Ｌ．ブリス博士は，邦人の患者にとても手厚かった。博士は1965年に日本政府から表彰され，守屋氏はブリス博士を日本に招待した。このときにブリス博士は収容所内の実景スライ

---

[7]『処置と脱出　比島戦線死闘のかげに』大島六郎，牧野出版，1977年，146頁。衛生兵だった著者の体験記録で，ルソン島北部山中の人びとの諸相，病院関係者による（絶命）処置，遺棄された乳児や邦人母子を連れての移動の様子などが記録され，その後の出版物でたびたび引用されている。この他，読売新聞大阪社会部による「新聞記者が語り継ぐ戦争シリーズ」は，市井の人びとの体験を記録し，戦時下で何が起きるのかを丹念に掘り起こした力作である。高く評価すべき仕事はたくさんある。引揚を待つ女性や子供のおかれている実情を，救助要請のために記録した飯山達雄の写真。戦争が何をもたらすのかを深く掘り起こした RKB ディレクター上坪隆や KTS ディレクター木村正のテレビドキュメンタリーなど。優れた記録者たちに共通しているのは，その記録を残そうとした動機，すなわち，出来事を正確に記録に残しておかねばならない，という強い自覚である。

[8]『比島捕虜病院の記録』守屋正，金剛出版，1973年。

ドを約30枚，日本に残していった。後にこれを入手した守屋氏は，それらの写真を残すために，当時の病院内の詳細な記録として，73年の書籍を刊行している。

守屋氏は収容所で目にした子供たちについて，「今でも，奇妙な手製の服を着て，頭と眼ばかり大きい痩せこけた子供たちが，首からPW番号を書いた荷札をぶら下げて，ドクター宿舎の前の廊下にずらりと座って，帰国のためのアンビュランスを待っていた姿を思い出す。この子供たちが今まで申した悲運を背負っていたのである」と記している（105頁）。女性のテントには男性日本人軍医である守屋氏は入れなかったが，看護婦から聞いた邦人婦女子の話も残している。

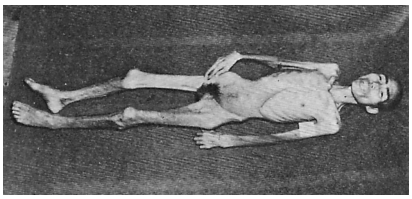
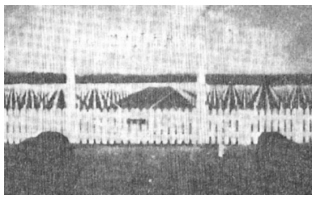
「一般邦人の哀れな姿もその看護婦は実見したといっていた。路上に敵の機銃掃射を受けて死んでいる日本人の母親の乳房を乳児がしゃぶりながら泣き叫んでいた光景，傷ついて虫の息の母親が通りすがりのこの看護婦たちに手を合わせて，子供だけどうか連れて行ってくれと哀願されたことがあったと語ったが，「今，自分が母親になってみて，あの惨状がしみじみと胸をえぐられるようによみがえって来ます」と附け加えていた」（36頁）

モンテンルパの収容所内の病院にある婦人・子供病棟は２室あった。１室に50人くらいで，100名は収容されていた。戦犯容疑がない婦女子は優先帰国だった。病院がカンルバンに移転した11月の終わりには，残っている婦女子は30名くらいになっていた。

さらに夫人・子供病棟の話が続く（100-105頁）。３歳くらいの孤児に看護婦さんが服を作ってやっていた。手に持っていた紙包みをカアチャンといい，開くと中に母親の遺髪がはいっていたので，作った服の胸にポケットを作って入れてやったという。日比混血児は，敗戦したフィリピンで日本人と同様の扱われ方をしていた。ある混血孤児と思われる子供が，日本語がわからずノイローゼになっていたが，イゴロット族の母親が迎えに来て引き取られていった。「小学一，二年の女の子で気の狂ったのがいた。これはマラリヤで発作的に狂うらしく，まともな時もあったが，狂うと暴れだして，金網小屋に入れられ，手足をコットにくくりつけられていた。この子は両親がルソン島より南の島でマニラ麻の工場を盛大にやっていたらしいのであるが，やはり両親とも山中で死んだので，一人ぽっちの孤児になった。そして気が狂うと何やら大きな声でわめきちらす。よく聞くと茨城県○○郡○○町○○番地といっている。どうも両親が死ぬ時，日本の本籍地を暗記させたものらしい。この子供は十一月に帰国させたが船の中で死亡し，水葬にしたことを附添の看護婦の便りで知ったと，Sは私に話してくれた」（104頁）。

ルソン島北部山岳地帯から捕虜収容所の病院に運ばれてくる人は，性別年齢に関係なく，飢餓，マラリヤ，赤痢などで瀕死だった。米軍に投降し収容所まで来ても，最初の１～２か月は，本人の名前を聞き取る間もなく，バタバタと亡くなったという。その亡骸はモンテンルパからトラックでカンルバンに毎日大量に運ばれ，火葬されずに埋められていった。米国は遺骨を DNA 鑑定で遺族のもとに還すのが常識となっており，火葬すると DNA 鑑定ができないことから，戦地では土葬が常だった。収容所の名簿で，unknown という分類になっているのはこういった人たちで，名簿に名前が記載されて亡くなっているのは，聞き取りのときにはまだ息があった人びとである。釜墓地に合葬された人びとが，カンルバンの墓地からの移送であれば，こういった人たちである可能性が

高い。この他に，偽装船橘丸で運ばれていた遺骨，引揚途上で亡くなった2000人に及ぶ各地からの老若男女が釜墓地で無縁仏となっている。

（画像左）高度の栄養失調患者。『比島捕虜病院の記録』守屋正，金剛出版，1973年，グラビア３頁
（写真中央）かなたまで続く白い墓標，カンルバン捕虜収容所の墓地の一部。（同上，15頁）
（写真右）フィリピンから引揚船に乗って帰ってきた孤児たち。11月３日に鹿児島に着いたフィリピンからの引揚者2992人のうち，50人の孤児がいた。慣れない寒さに震えているので，米兵が毛布を掛けてやった，とのキャプションがついている。『１億人の昭和史　日本占領　１降伏・進駐・引揚』毎日新聞社，1980年，P247

２．追悼式の違和感

ここからは，釜墓地戦没者追悼式に話を進める。釜墓地に合葬された6000を超える無縁仏の多くは，上述のような人びとと考えられる[9]。それを踏まえ，追悼式の場の変質と，その変質を捉え切れない新聞報道の現状について，考察する。

イベント前日の現地の様子からは，釜墓地の戦没者追悼式が例年通りに続いているように見えた。護持会の努力によって組織づくりや資金繰りがなされ，善意のボランティアが手慣れた様子で清掃やイベントの裏方を担っている。昨今，関係者の多くが鬼籍にはいり，継続が難しくなっている追悼や慰霊の場が増えているが，檀家のいない無縁仏だけの墓地追悼式の厳しさは見えなかった。

しかし，追悼式に参加させていただき違和感があり，翌日の新聞紙面を見てその理由に気づいた。そこで過去の様子を探して重ねてみると，今後への懸念が明確になっていった。このケースから，近い将来，戦争体験者に頼る報道ができなくなる時期に備えてすべきことを考察する。

２－１　釜墓地の歩みと公的認知の過程

ここで，釜墓地に関わる出来事を時系列で整理しておく。釜墓地の存在が公的空間で共有される段階は，各種文献から確認できる現状の中では，およそ以下の３つと考えられる。１．地元民間人の有志によるささやかな弔いの継続段階，２．マスメディアによってその存在が知られる段階，３．

[9] 筆者はルソン島北部決戦について，ルソン島北部の現地での戦跡調査（2017年10月，2018年５月，９月）と，資料４のような記録本の通史的分析，戦中・戦後のマスメディア内容分析などを続けている。体験者の語りや記録本の記述内容と，史実の相違をめぐっては，異なるテーマと手法での幅広い検証が必要だが，本稿の主題から逸れるので別紙に譲る。

マスメディアによって厚生省に対する問題提起がなされる段階，である。

1949年１月から１カ月にわたって釜の海辺で荼毘に付されたご遺体は，その一部を除いて火葬場の一角の土盛りの中に合葬された。GHQ は，後述するように，外地での引揚者の悲惨な体験について厳しい情報統制を敷いていた。捕虜の辱めを受けず，という戦陣訓がもたらす日本人全般の引揚者に対する，満州乞食，といった侮蔑や差別の意識もあった。49年当時，捕虜収容所から送られてきた遺骨や遺体の，人里離れた寒村への帰国に気づいたという遺族の記録は，今のところ見当たらない。釜の海辺での火葬に関わった人たちのうちの数人が，遺骨が放置されたままではあまりにも気の毒に思い私財や托鉢で資金を工面し始めた。1958年には，ひとりの僧侶があばら屋で墓守を始めた。地元のマスメディア各社が折々に報道しているが，地域ニュースの位置づけだった。

全国メディアが釜墓地をまとまって取り上げ，その存在を知らせた草創期の例としては，1965年（終戦20周年記念）の『アサヒカメラ』がある（本稿3－3も参照）。1965年の前後に，新聞の地方版や地元の月刊文芸誌『虹』に関連記事が出て，釜墓地に対する認識が地元に少しずつ広がり慰霊祭も行われた。しかし，釜墓地周辺の拡張工事で道路が遮断され，行き来が途絶えてしまった。

３段階目は，終戦30周年記念となる1975年から釜墓地33回忌となる1982年あたりである。釜墓地の知名度を全国レベルに広めたブレイクポイントは，読売新聞大阪社会部が1982年に大阪で開催した第４回「戦争展」に，釜墓地の名簿を展示したことによる（本稿3－4参照）。その後，地元のテレビ長崎を筆頭として全国ネットで放映されたテレビドキュメンタリーの力作も制作されている。残念ながらまだ，作品の視聴ができないが，地元テレビ長崎の木村正ディレクターによる２本のドキュメンタリーは，厚生省を動かす伝播力があったと思われる[10]。

80年代には，釜墓地へのご遺骨帰還に関する関係者内の知名度がある程度定着し，地元でも釜墓地の保存や弔い方について関心が広がった。82年８月には，第一回の釜墓地戦没者慰霊祭が民間の協力で行われた。現在の追悼式も同じ民間団体が中心にとなって行われている。しかし，2014年に，民間団体だけでなく行政も主催に加えることで，イベントが仏式から神道形式になり，イベントの名称も慰霊祭から追悼式に変わった。イベントの変質は，この節目を経て起きている。

以下に参考資料として年表を付記する。この年表は，主に本稿の前述注５に記した書籍類と，佐世保の月刊文芸誌『虹』（九州公論社，1952年～2018年（18年３月号をもって休刊中）のバックナンバー／筆者が2019年５月11日・12日の両日，編集発行人の河口雅子さんへ聞き取り調査をさせていただいた時にご提供いただいた資料類）を出典として筆者が作成した。

▼第一回慰霊祭開催までの経緯

1945年10月14日　～1948年６月　佐世保市針尾北町の浦頭港に130万人6163人が引揚げる

1948年12月21日　　ボゴダ丸が佐世保港からマニラ港に向けて出港した。カンルバン捕虜収容所

[10] 一本目は1988年６月25日にフジテレビ系列で放映されたテレビ長崎『消えた遺骨―勲章花の永い旅』，二本目は同じくフジテレビ系で1991年５月31日に放映されたテレビ長崎『遺体名簿―見捨てられた英霊たち』である。後者は，民放祭九州沖縄地区で優秀賞を受賞している。

の墓地から掘り起こされたご遺体4515柱，ご遺骨307柱を日本へ輸送するためだった

1949年１月９日　　ゴボダ丸が浦頭港に到着した[11]

1949年１月10日　　米第８軍のフロール中佐から，「全てのご遺骨を確実にご遺族に届けるように」という厳命とともに，日本側責任者に名簿が日本側に引き渡された（「慟哭の釜墓地」12頁）

1949年１月11日から　　ハシケよる釜海岸への移送と陸揚げ

1949年１月13日から２月11日まで　　海岸での火葬処理[12]

1949年２月～1959年　　火葬の現場責任者だった駐留軍労務者の平井富尾氏（当時54歳・元海軍軍人，1967年没））の呼びかけで，日蓮宗の僧侶田尻文亮師（当時63歳），長崎のお寺の僧だった芳林秀樹師ほかが慰霊碑建立の托鉢を続ける。平井氏は合葬された土盛りの上に私財で供養塔を立てた。この間，1958年に12月11日に，日蓮宗派の本仏寺（10坪たらずのバラック）を建て，以後，芳林師が一人で釜墓地に常駐し，弔いを続けていた。月に一度，地元の有志の女性たち十数人が，清掃と供養などで集っていた

1959年10月　　托鉢の浄財によって，高さ５メートルの護国慰霊碑を建立

1963年　　釜墓地周辺用地約540坪を購入

1964年　　旧援護局営門詰め所の払い下げを受けて，廃屋寸前ではあるが御堂と梵鐘を建設

1964年・66年　　８月にささやかな慰霊を行う

1964年11月～65年６月　　・毎日新聞地方版連載「激動20年・長崎県の戦後史」の中に，「引揚哀歌・比島戦没者の火葬」の記事

1965年　　・月刊『アサヒカメラ』８月号「特集・記録写真　長崎の記録・遺体帰還＝日宇弘海」

1965年　　・月刊誌『虹』11月号「嗚呼釜墓地―終戦がまだここにある」（白木原時呂早岐警察署長）

1967年　　針尾工業団地の造成のため釜墓地への通路が完全に遮断され，参拝者が途絶えた。お堂で一日に３回，芳林師によってつかれる鐘の音で，釜墓地の存在がかろうじて知られた

1968年１月　　＋米原子力空母艦エンタープライズ佐世保寄港反対闘争（反戦・反核・反米）

1980年　　針尾工業団地の造成が終わりに近づき，釜墓地への車での通行が可能になったことから，社会福祉法人長崎博愛会（宮内雪夫理事）が，職員と，植樹や清掃などを始める

1981年８月　　・月刊『潮』８月号「特集　戦後のない人たち・佐世保，引揚者140万人の望郷」河口憲三，『虹』８月号「釜墓地に祈る」河口雅子

---

[11] 文献によって日付にばらつきがある。本稿では，復員課の小林敬四郎課長代理の報告『佐世保引揚援護局史』（前述，458頁）　による。

[12]「特筆すべきことは，49年１月，米軍の行為により，比島に眠る同胞の遺体四千五百十五体と，遺骨三百七柱が，比島から到着，引渡しを受けたことであろう。局においては米軍の行為に感謝するとともに特に遺体処理本部を設け，周密な計画の下に，慰霊の処理に万遺憾なきを期したのである」（「佐世保援護局史　下巻」１頁（この部分の執筆者は，佐世保引揚援護局次長・笠島角次郎氏で，記述日は1950年５月１日。この人物はその後も，厚生省の言い分に重なる説明を続けた。

1982年６月　　宮内氏を中心として釜墓地護持会が結成され，全国に釜墓地の由来が伝播

1982年８月　　・読売新聞大阪社会部取材の「戦争展」に，釜墓地の合葬名簿が展示される。展示に先立ち，記者が厚生省に遺骨の扱いを問い合わせ，現場との乖離から調査を始める。同年12月には，福岡の月刊九州代表・小西龍造やマニラ山中会会長・小南正五郎らによって，遺骨を遺族の手に戻す運動も始められた

1982年８月15日　　第１回慰霊祭（第37回終戦記念日）を，民間人の手で開催した

1984年10月　　テレビ長崎製作「今日は長崎―浦頭はいま」のレポーターで，『虹』の編集次長だった河口雅子が協力（関連記事『虹』12月号）。テレビ長崎の木村ディレクターが釜墓地を訪れている

1988年６月25日　　・テレビ長崎『消えた遺骨―勲章花の永い旅』がフジテレビ系で放映される

1991年５月31日　　・テレビ長崎『遺体名簿―見捨てられた英霊たち』がフジテレビ系で放映される

2014年４月20日　　第33回の慰霊祭から，追悼式に移行。同年10月20日に，佐世保引揚援護局の「供養塔」を佐世保緑地公園に移設。本仏寺の大木住職が「抜魂の儀」を行う。同12月に釜墓地「供養塔」が完成し，住吉神社宮司・堤禰宣により入魂式（仏教式から神社式に変更）

2016年１月29日　　天皇皇后のフィリピンでの日本政府建立「比島戦歿の碑」慰霊（日本人犠牲者518,000人）の日に合わせて，会長と県や市の担当者が献花拝礼を行った。この年までに，身元の判明した累計数は579名。追悼式への公式参加者数は約500名

２－２　第38回佐世保釜墓地戦没者追悼式・式次第

ここで，2019年の追悼式当日の式次第を確認する。イベントの主催者は，社団法人・長崎県・佐世保市からなる「佐世保釜墓地戦没者追悼式実行委員会」になっている。式次第は，以下の通り。当日配布された式次第には，登壇者すべての所属や肩書，フルネームが記されており，A3版横２段組みで100人近い名前が印刷されている。

【2019年５月12日　追悼式・式次第】……（　）内は筆者による追記

10：00－10：30　海上自衛隊佐世保支部音楽隊の演奏

10：30－11：30　式次第

１　開会の辞　　２．国家斉唱　　３．黙祷　　４．献上（海上自衛隊関係者４人，陸上自衛隊関係者４人，米海軍関係者１人，参議院議員１人，合計10人がひとりずつ供花）　５．献上（近隣の小学生児童会の２人と，中学生生徒会の１人によって，おにぎりと霊水を献上）　　６．式辞（佐世保釜墓地戦没者護持会会長・宮内雪夫）　７．追悼の言葉（長崎県知事，佐世保市長，衆議院議員１人，佐世保東翔高校生徒会２人，ご遺族代表１人，計５種）　８．弔電・メッセージ　９．献花拝礼（国会議員３人，県議会議員10人，市議会議員14人，遺族会など10，地元の学校教育関係６，地元の各種公的団体や老人クラブ15，地元の企業８，県内のお寺など19他で合計85人。その後，ご遺族・一般参列者が列をつくって献花，最後に実行委員会関係３団体の献花）　10．閉会

の辞（実行委員会）。

・追悼式当日の違和感

当日に追悼式に参加させていただきながら体感する違和感は，主に以下の７点だった。

１．筆頭の来賓の９割が自衛隊関係者（８人）と米軍（１人）で，来賓席最前列を占める。所属・肩書・名前をアナウンスされ，１人ずつ献上供花するので時間もそれなりに費やされ存在感が大きかった。米軍の広報官が米軍司令官の献花の様子を真剣に撮影していた。

２．献花拝礼が85人もおり，その多くが議員や地元の団体だった。国会議員の寄付額が大きくて助かる，という話は前日に聞いていた。１人ずつ名前と肩書のアナウンスがあり，呼ばれて出ていって献花拝礼するため，時間的存在感も大きい。

３．数十人の遺族は，会の終わり頃に三々五々つらなって献花。

４．遺族関係の登壇者は孫ひとりで，存在感が薄い。

５．釜墓地に合葬されている人の体験が全く語られない。

６．今の政権での遺骨収集の国家的取り組みについて，担当議員から長い説明があった。

７．開会に先がけての海上自衛隊の演目が，軍歌と昭和の歌謡曲などだった。

自衛隊関係者と議員，寄付者の登壇にイベントの多くの時間が割かれ，遺族の影が薄い式典だった。事前の件のホームページリリースでの式典予想とも違う展開だった。無縁仏の墓地ゆえ致し方ない面もある。しかし，合葬された人びとの生きざまへの本格的な言及がなく，合葬された人びとの無念に接続するきっかけがほぼ見当たらなかった。

ここで参考までに，追悼式になる以前の，本仏寺としての慰霊祭のときの式次第を確認しておこう。釜墓地のパンフレットに15年前（2005年）の第24回慰霊祭式次第や，27年前（1992年）の慰霊祭の写真が掲載されている。

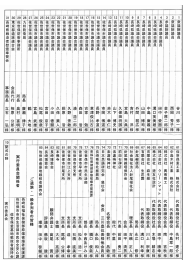
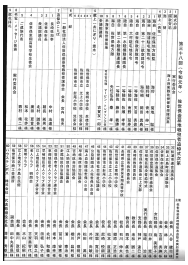
【2005年　第24回慰霊祭・式次第】

慰霊演奏　海上自衛隊佐世保音楽隊

式次第

１．師衆入場　２．開会の辞　３．国家斉唱　４．黙祷　５．献花（護持会会長，米海軍佐世保基地司令官），６．献水　地元の小・中学校児童生徒代表　７．慰霊祭文（本仏寺住職）　８．祭主慰霊の言葉　９．遺族代表慰霊の言葉　10．御回向　11．来賓慰霊の言葉（衆議院議員，長崎県知事，佐世保市長）　12．弔吟　13．慰霊電報奉読　14．献花　15．閉会の辞。

▼2019年の会場全景と当日の式次第

（写真左）釜墓地入口から右手奥に見える白いテント部分が追悼式会場。空に向かってでている棟はハウステンボスのシンボルタワー。釜墓地はハウステンボスと米軍居住区に挟まれている。

（写真中央）釜墓地入り口から左手奥に，合葬されている土盛りと，その上に観音像がある。

（写真右）第38回追悼式の会場で配布された式次第。

▼2019年の追悼式の様子（当日の写真撮影，報道カメラマンの会田法行氏）

（写真左）　正面左側の来賓席最前列は，自衛隊の幹部が８人と米軍幹部が一人，正装して並ぶ。

（写真中央）　追悼式の冒頭で最初に動きのある献花。

（写真右）祭壇の真正面中央には，「cemotaph for world war II victims」という英語のプレートが供養塔の前に設置されている。献花するときに視野に入るのはそのプレートとピンクと赤の華やかな花束で，供養塔が後景になる。言葉の意味は（第二次世界大戦の犠牲者のための慰霊）。

▼1992年，2015年の式典の様子（出典：前掲『慟哭の釜墓地』38-41頁より抜粋』

（写真左）　27年前（1992年７月12日）の慰霊祭。仏事の関係者も多い。釜墓地は檀家のいない仏寺の一つで，近隣の仏寺からの応援で成り立っていた。地元の自衛隊関係者の来賓参加もあるが，存在感は大きくない。

（写真中央）　27年前（1992年７月12日）の慰霊祭。遺骨が合葬されている土盛りが祭壇。

（写真右）　2005年７月24日の慰霊祭。最前列の来賓５人は，左から，遺族代表西村重利氏。衆議

院議員で防衛庁長官政務官の北村誠吾氏，米海軍佐世保基地司令官，護持会会長の宮内雪夫氏，長崎県知事（代理）。米海軍の参列には諸説あるが，カンルバン捕虜収容所の墓地から遺体や遺骨が遺族に届くように，名簿や遺体帰還を準備した米軍の「好意」に感謝する声は多い。イベント冒頭の献花は，資料で見る限りだと護持会会長と米海軍佐世保基地司令官の二人である。

２－３　翌日の３社新聞紙面

2019年５月12日に，佐世保市では二つの戦没者慰霊のイベントがあった。一つは本稿の事例となっている釜墓地の追悼式で，もうひとつは近隣にある特攻艇「震洋」訓練基地跡での慰霊祭である。ここでは，地元紙・エリア紙，全国紙地方版の扱いを比較観察する。それぞれに個性がある。

西日本新聞は，朝刊18面の長崎県版右上に，このふたつのイベントを一人の記者が担当して掲載している。まとめた大見出しを横に入れて上下に区切り，上段に釜墓地，下段に特攻艇の追悼イベントに関する記事を，それぞれ写真つきで掲載した。二つの記事の面積はほぼ同じだが，上の方がニュースバリューが大きいので，多少釜墓地を重視した記事になっている。

読売新聞は，朝刊27面・地域の佐世保版左上に，２つのイベントを別々の記事として掲載している。レイアウトでは，上に特攻艇，下に釜墓地の記事を縦に並べて配置しており，ニュースバリューは上段が上位にくる。イベントの規模を主催者側の発表だけでみれば，釜墓地の参加者が特攻艇のイベントより２倍多いが，記事量も写真の扱いも特攻艇の方が明らかに大きく，出来事と記事の位置づけが逆転している。新聞社独自の価値観として，明らかに特攻艇のイベントを重要視している。

長崎新聞は，朝刊３面ローカルの左上に，釜墓地の記事だけが写真付きで掲載されている。特攻艇のイベントについては，この日の朝刊の中には記事がなかった。

次に，釜墓地追悼式の記事内容を比較してみよう。

イベント当日は新聞・テレビ各社の記者が集い，定型の作法で取材されていた。しかし，翌日の３紙の記事を見て，違和感は問題として認識すべきものと考えるに至った。問題は２点ある。

ひとつは，参加人数の記述についてである。式への参列者は，主催者側関係者も含めて200人前後だった。地元の人や顔なじみも複数見受けられ，主催者側と参加者の見分けがつきにくいこともあって，およその数字である。主催者側は，来賓200人くらいには声をかけている，とのことだった。しかし，３紙ともに参加者数に400人という数字を記載している。主催者側の公式の数字が水増しであることは常だとしても，そうであれば主催者側によれば～，実際には～，と記載すべきほどに現場と記事の数字にギャップがある。補足しなければ，読者に誤解を生んでしまう。

もうひとつは，参加者の構成についてである。前述のような来賓構成や式次第がイメージできる記事になっていない。８人もの自衛隊幹部が筆頭来賓，議員などの寄付者や地元組織から来賓80人以上，遺族席には数十人，一般席はがらがら，という参加者の構成が記事からも写真からも全く伝わってこない。慣習的記事や，主催者側発表情報のルーティン処理だけだと，せっかく現場に足を運びながら記録しそこなう。読売新聞の場合は，２つのイベントのニュースバリュー判断の基準に，現場の事実，とは異なるものさしがある，ということになる。検証がさらに必要である。

以下が当日の各紙紙面と記事全文である。

▼『西日本新聞　2019年５月13日　朝刊（長崎県版）

（大見出し）　令和の平和　戦没者に誓う

（見出し１）　兵士や引き揚げ者眠る釜墓地　追悼式に400人参列　38回目　地元護持会など開催

（本文）　佐世保　　戦後にフィリピンから引き揚げ船で運ばれた旧日本兵の遺骨，引き揚げの途中で亡くなった人など約6500柱が眠る佐世保市江上町の釜墓地で12日，戦没者追悼式があった。遺族をはじめ県内外から約400人が参列した。

佐世保釜墓地戦没者護持会や県，市でつくる実行委員会（宮内雪夫会長）の主催で38回目。護持会は今も遺骨の身元調査を継続している。昨年，東京出身の１人の身元がわかり，身元判明者は581人となった。

追悼式に400人参列
地元護持会など開催
令和の平和 戦没者に誓う
殉国の碑前で冥福祈る
慰霊祭に元隊員，遺族200人
ゆかりの表記残し 乗客運ぶ

叔父がフィリピンで戦死したとみられる京都市中京区の池田めぐみさん（64）は母親と毎年追悼式に参列している。「叔父の遺骨はまだ日本に帰っていない。しかし，このように地元の方が慰霊してくれていて感謝しています」と話した。（竹中謙輔）

・写真１枚（キャプション　献花台に花を手向ける参列者）

（見出し２）　　戦中に特攻艇「震洋」訓練基地　　殉国の碑前で冥福祈る　　慰霊祭に元隊員，遺族200人

（本文）　川棚　　戦時中に特攻艇「震洋」があった川棚町新谷郷で12日，戦没者を弔う慰霊祭があった。特攻隊員ら3511人を祭る「特攻殉国の碑」の前で，元隊員や遺族ら約200人が冥福を祈った＝写真。

震洋は太平洋戦争末期に旧日本海軍が開発した水上特攻兵器。ベニヤ板製のボートに爆薬を搭載し，体当たり攻撃をした。

慰霊祭は地元の住民が毎年主催し，53回目。新谷郷総代の広川英雄さん（82）は「多くの青少年が殉国の碑を訪れている。平和の尊さを伝え続けたい」とあいさつした。

元特攻隊員の進藤貞雄さん（94）＝同町小音琴郷＝は川棚で訓練を受け，出撃せずに台湾で終戦を迎えた。「戦争はやったらいかん。これを伝えるために毎年参加している」と話した。（竹中謙輔）

・写真一枚　キャプションなし』

▼『讀賣新聞　2019年５月13日　朝刊27頁　（地域）佐世保

（記事１　見出し）　特攻艇「震洋」隊員ら慰霊　　川棚　200人参列，不戦の誓い新た

（本文）　太平洋戦争末期に投入された旧海軍の水上特攻艇「震洋」などに乗り込んで戦死した隊員の慰霊祭が12日，川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」前で営まれた。元隊員や遺族ら約200人が参列し，海に散った隊員の冥福を祈り，不戦の誓いを新たにした。

震洋はベニヤ板製の小型船（最大２人乗り組み）で，船首に約250キロの爆薬を積み，敵艦に体当たりする特攻兵器。約6200隻が造られ，約2500人が戦死したといわれる。

同町には戦時中，訓練拠点「川棚臨時魚雷艇訓練所」が置かれ，戦後に殉国の碑が設けられた。

碑には震洋などに乗り込んで命を落とした約3500人の名前が刻まれている。

式では，元隊員の同町小音琴郷，進藤貞雄さん（94）が「戦後74年となり，平和と繁栄を当然と考えがちになるが，尊い犠牲の上に築かれたものだ。悲惨な戦争が繰り返されないよう，記憶を継承しなければならない」と慰霊の言葉を述べた。参列者は献花し，手を合わせて若い隊員たちの死を悼んだ。

・写真１枚　キャプション　戦死した隊員の冥福を祈る参列者

（記事２　見出し）　釜墓地で戦没者追悼式　佐世保

（本文）　　佐世保市江上町の釜墓地に眠る戦没者の追悼式が12日に開かれ，県内外から訪れた400人が平和の尊さをかみしめた。

27 社会 12版 佐世保 2019年(令和元年)5月13日(月曜日)

佐世保

特攻艇 震洋 隊員ら慰霊

釜墓地で戦没者追悼式

墓地には，終戦後の1949年にフィリピンからの引き揚げ船で運ばれた遺体や遺骨のほか，引き揚げ途中に亡くなった人ら計約6500柱が祭られている。

式には遺族のほか，県や市，米海軍佐世保基地の幹部らが参列。佐世保釜墓地戦没者護持会の宮内雪夫会長が「国の礎となった英霊に，深い哀悼の気持ちと心からの感謝をささげます」と式辞を述べ，参列者が献花台に花を手向けた。

佐世保東翔高３年の松本花歩さん（17）は「尊い犠牲の上に今の平和があることを，決して忘れてはいけない」と話した。

墓地に埋葬された人の身元確認は進んでおらず，これまでに判明したのは581人と１割にも満たない。遺族を探している同会への問い合わせも，昨年度は３件しかなかったという。

・写真１枚　キャプション　献花台に花を手向ける参列者』

ローカル

6500柱に献花 「平和の尊さ次世代へ」

佐世保・釜霊園で追悼式

まるごとるーかる

▼『長崎新聞　2019年５月13日朝刊　３面ローカル

（大見出し）　6500柱に献花　「平和の尊さ次世代へ」

佐世保・釜霊園で追悼式

（本文）　　第２次世界大戦後に，フィリピンの日本人収容所や引き揚げ途中で命を落とした人が眠る佐世保市江上町の釜霊園で12日，追悼式があり，全国の遺族など約400人が戦没者に思いをはせた。

佐世保釜墓地戦没者護持会（宮内雪夫会長）と県，市でつくる実行委が主催し，38回目。釜霊園では，1949年１月にフィリピンから佐世保市の浦頭港に着いた引き揚げ船「ぼごだ丸」で運ばれた軍人らの遺体や遺骨のほか，船内などで亡くなった引き揚げ者約6500柱を供養。護持会は遺族などを探しており，これまでに約580柱の身元が明らかになっている。

黙とう後，近隣の市立東明中，江上小，針尾小の児童生徒が供養塔におにぎりと水を供え，遺族らが花を手向けて悼んだ。

宮内会長は「末長い平安に向けた努力を誓う」とあいさつ，遺族代表で祖父が戦没者の西村靖二さん（49）＝福岡県八女市＝は「高齢化で遺族の参加が難しくなっているが，平和の尊さを次の世代に伝えることはできる」と述べた。（嘉村友里恵）

・写真一枚　キャプション　戦没者を悼み，花を手向ける遺族ら＝佐世保市，釜霊園』

２－４　新聞が伝えるイメージと現実のギャップ

上述のように，イベントと新聞記事を重ねて観察することで気づくのは，端的に言えば，記事から想像されるイベントと実際のイベントに大きな乖離があることだ。遺族等の追悼関係者がほぼいなくなる中で，場を維持するための集金に，議員の寄付や組織ぐるみの支援が不可欠とのことだった。裏を返せば，議員の宣伝の場であり，集票の場ともなる。棄民化された残骨を哀れに思い，数十年に渡って地元の個人が手弁当で弔い続けていた釜墓地は，政治の場としてすっかり脱皮してしまったのかもしれない。

難しさはある。場を維持するために公的・恒久的支援を，県や市の行政も巻き込んで行う形をとらざるを得ない。その場合は，読経や回向など宗教色のある儀式を含む慰霊祭は政教分離の原則からできず，祈りの場が形骸化しやすい構造がつねにある。体験者や当事者という語りの主役がいなくなり，しかし場を保つはざまで，登壇者が自衛隊関係者になっているのが，釜墓地の特徴である。

新聞記事データベースで戦争関係の記事検索をすると，ここのところ慰霊祭や追悼式の記事ばかりになってきている。しかもそういった場でハイライトとなっていた体験者の語りが，高齢化によって抜け落ちていく。全国の末端で，その空白を何が埋めていくのか，なにで補うべきなのかは，構造的に皆で熟考すべき事と思う。今のままだと，記者のルーティンを無意識に踏襲することになる。新聞だけを読み続けたら，誤記ではないのに，現実の認識を誤ってしまう。悪意なく，故意でもなく，イデオロギーによる偏りでもなく，当事者に取材して記事にしていくルーティンワークの日常風景が現場にあった。子供たちや遺族にカメラが向けられ，式の終わった会場で，遺族関係者に取材者が耳を傾ける。しかし，形骸化した定型の記録があることで，その場の変質は不可視化されてしまう。今年初参加の学校代表の児童たちにとっては，数年前までは来賓の存在感がなかった自衛隊が，最前列にずらっと並ぶ風景を，そういうものだと思うだろう。

・過去と比較する視点からのニュース価値判断

1992年，2005年の慰霊祭に，上述のような違和感はない。事前に比較し，歴史を辿っておけば，2019年の追悼式が，戦没者の慰霊や追悼から，国防を担う人への称揚へと，場の目的が変質しつつあると記者は考えたかもしれない。土盛りの下に合葬されている人びとの中に，カンルバンまで行きつきながら栄養失調で体力がつきてしまった母子や，両親を思いながら亡くなった台湾や朝鮮からの少年工もいたと思われる。そんなことを，多少なりとも事前に知っていたら，現場の風景は違って見え，記事も変わったかもしれない[13]。慰霊祭ではなく追悼式に衣替えをする，ということに対する基礎知識が記者側にあれば，現地での聞き取り相手や質問内容が変わった可能性がある。

行政や政治家によって追悼式の資金が賄われ，変質することはよくあることだ。しかし，かつて憤りを持ちながら私財をはたき，あるいは，手弁当で慰霊の場を支えた人びとがいたときの形式だ

けを，今のマスメディアがなぞることで，残像だけを伝えたら害悪だ。結果として，記事の読み手に現実とは異なるイメージを与えるとしたら，それは誤報と言わざるを得ない。報道機関が，戦争を伝える場の変質を捉えられないことの危うさが再認識される事例である。

現場の第一線にいる報道記者は，時として歴史を記録し，歴史の変質を食い止める力を持つこともあるのである。今，変質を記録する力が必要ではないだろうか。以下では，釜墓地を例として，報道における可視化と不可視化の攻防について，時代背景の動きに沿って若干の考察を加える。

３．記録の不可視化と可視化の攻防

20世紀の日本報道史は，同時代を生きた人たち以外には共有されていないことが多い。ここでは，釜墓地追悼式の場におけるニュースバリューを考えるために必要な背景を，情報の統制と開示の観点からみて重要な４点に絞り，考察する。

３－１．敗退や特攻戦などに対する戦時情報統制

合葬されている人たちのことを知るには，戦時中のルソン島北部決戦末期の状況を知る必要がある。しかし，大本営による情報統制は，陸軍と海軍の間ですら情報共有できなかったことは衆知である。ましてや現地の末端の人びとが後に語れることは，まさに自らが肌で体験した範囲と，風評・伝聞となる。記録のなかで，実体験と見聞を分けて辿るのが甚だ難しい。記憶に曖昧さはつきものだ。

公文書の多くは敗戦時に積極的に燃やされており，GHQ が本国に送り米国の公文書館などに入っている史料が日本のメディア史研究に役立ってきた。いずれにせよ，プロパガンダ戦の強力な担い手となっている当時の新聞やニュース映画では，時の政府・軍部の言い分以外がほぼわからない。例えば，1945年１月５日に朝日新聞社から出版された『戦争一本　比島戦局と必勝の構え』（大本営海軍報道部長　海軍大佐　栗原悦蔵述，朝日時局新聞）では，すでに現地では食べものもなく，飛ばす特攻機すら途切れ，米軍がルソン島に上陸してくる時期に，「戦局を決するもの―航空機」と締めくくっている。

毎日新聞社が現地での発行を担当した「マニラ新聞」は，サイパンが玉砕した44年７月当時，160人の日本人社員と2000人を超えるフィリピン人を雇っていたという。９月末には，内地からくる輸送船の米軍による撃沈率が８割を超えた。翌年２月のマニラ市街戦のころには，すでに男性社

[13] 1984年１月21日に釜墓地でマニラ会22人による墓参が行われた。82年夏に読売新聞大阪本社の戦争展に展示されていた名簿がきっかけで釜墓地に埋葬されていることに遺族が気づいたという。合葬されている松本澄子さん・松本和恵さん母子は，モンテンルパの米軍野戦病院で病死したと風の便りに遺族は聞いていたという（『虹』1984年３月号「マニラ会22人の墓参　釜墓地に３遺族が涙の対面」，13頁）。母子で引揚げてくる途中の船の中で１歳２か月の田靖郎さんを亡くした女性は，子供の遺体を船中に残して上陸，収容所で遺骨を受け取ったことから，釜墓地で荼毘にふされたのではないかと思い，訪れている（『虹』1984年12月号，26頁）。

員の大部分が出征し，残りの社員は司令部が移動したバギオやマニラに分散した，との記録がある[14]。日本占領下のフィリピンに新聞社社員が大勢いた。しかし，軍との強いつながりと情報統制のなかにあり，紙面に掲載された記事も書き手の意識も，これをどう扱うかは幾重にも検証手続きが必要である。

３－２．占領軍 GHQ による「引揚記事」の情報統制

GHQ 総司令官のマッカーサーは，日本軍がフィリピン戦を戦った相手の総指揮官である。占領下にあって原子爆弾の被害について厳しい情報統制があったことはよく知られているが，1951年まで実にさまざまな情報統制が米軍によって行われていたのである。引揚に関する司令部からのチェックも，まことに細かいものだった。

例えば，フィリピンから遺体帰還の話がアメリカから日本政府にあったのは1948年春[15]とのことだが，同年４月の「検閲旬報第一号」のデータは次のようになっている[16]。提出ゲラ刷りが1878本。その中で事故ゲラが181本で内訳は，保留後削除なしで許可が113本，削除許可が51本，ボツが17本となっている。事故ゲラとは，GHQ の検閲に引っかかったゲラのことである。保留後に許可となっていても，記事掲載日が遅くなったことで意味をなさない場合も多かった。

引揚関係の記事では，戦犯の遺書や，すみやかな引揚の陳情，元将校たちの談話，外地での引揚待機者の様子などは，いずれも削除対象になっている。48年３月時点でも，「引揚げ報道徐々に緩和」という状態だった[17]。GHQ の事前検閲が事後検閲に変わったのは，1948年7月だが，占領下であることに変わりはない。いわば躾けができてきたので事後検閲へと手綱を緩めた，と見る方が合理的である。それでも，労働運動，原爆被害など，厳しい検閲が続いており，言論の自由のある社会とは程遠い。日本の新聞人にとっては，検閲者が大本営から GHQ に変わっただけ，ともいえる。今日，日本の報道界における自主規制の慣習は，戦前から培ってきたものなのである。

３－３．拠り所となった日宇弘海氏の写真記録・1949年１月（資料２，参照）

今日，釜墓地の記録写真はほぼ唯一，写真スタジオの技師だった日宇弘海氏が撮影したものである。日宇氏は戦前から絵画に関心があり，写真館で写真技術を学んでいたことから，佐世保引揚援護局の嘱託カメラマンとして，1949年１月のボゴダ丸で帰還したご遺体の処理の記録写真を撮るよう頼まれる。日宇氏ご本人は，「局史掲載用の写真を撮るため庶務課の中村情報主任と譜久村事務官につれられて，朝の暗い中から浦頭に向かった」との記述を残している[18]。筆者は，故人のご家族の中で唯一対応可能とのことで，2019年６月17日に三男の日宇寛記氏のご自宅でお話を伺わせていただいた。残念ながらネガの所在は，今のところ不明である。

釜墓地の話題が全国レベルのマスメディアでまとまった扱いを受けたのは，前述のように1965

---

[14]『皇后の股肱　民草としての決算書』千田夏光，晩聲社，193頁

[15]『海外戦没者の戦後史　遺骨帰還と慰霊』浜井和史，吉川弘文館，2014年，189頁

[16]『マッカーサーの新聞検閲　掲載禁止・削除になった新聞記事』高桑幸吉，読売新聞社，1984年，30頁。

[17] 同上，247頁

[18] 前掲『佐世保引揚援護局史　下巻』（225頁）

年８月号のグラフ誌『アサヒカメラ』に長崎の記録写真特集のひとつとして，日宇氏の写真が組み写真で世の中に出たからである。特集を組むにあたって編集部から依頼された日宇氏は，1965年当時，54歳で写真スタジオに勤めていた。ずっとしまい込んでいたネガを出してみたが，すでにだいぶ傷みが進んでいた，と記事の中で語っている。今日，釜墓地の近隣にある佐世保引揚記念館の展示パネルは，日宇氏の写真で大部分が構成されている。釜墓地護持会の作成している前述の『慟哭の釜墓地』『年表』などでも，当時の様子を示す写真は唯一，日宇氏の撮ったものである。

・同じ写真でもキャプションによってニュアンスが変わる

新聞社でも日宇氏の写真を利用している。例えば，『一億人の昭和史４　空襲・敗戦・引揚』（毎日新聞社206-219頁，1975年）も，日宇氏の写真で特集が組まれている。25点からなる組み写真で，佐世保に引き上げてきた人びとの様々な様子が多角的に捉えられている。釜墓地関係では，10年前に発売された上述の『アサヒカメラ』と同じ４点が使われているが，キャプションが異なる。

日宇氏本人のキャプションである『アサヒカメラ』は出来事の説明だが，『別冊シリーズ』の毎日新聞編集者がつけたと思われるキャプションや本文は，戦争被害者としての感情を意図的に醸し出すものとなっている。

例えば，1975年に発刊された（別冊）の該当頁冒頭の説明文は以下のようになっている。

「無言の帰国　　引揚げは生還者だけではなかった。戦没者あるいは引揚げ途上で死亡した者もすくなくない。その遺体（未火葬）・遺骨も帰ってきた。激戦地だったマニラから，戦没遺体が遺族に還されることになった。24年１月９日　佐世保へ帰港した「ボゴダ丸」の一般人を含む遺体は佐世保郊外・野天火葬場で荼毘にふされた。火葬後，遺骨は氏名不詳者を除き，家族に引き渡された。海外戦没者の本格的な遺骨収集は28年から始まり，現在もなお行われている」。

しかし，この記事の説明とは異なり，実際には大部分のご遺骨は遺族に引き渡されていない。日宇氏は1973年に病死している。75年発刊の別冊のキャプションは，撮影者本人は確認していないと考えられる。撮影者が直接確認している1965年の紙面と，10年を経て撮影者が亡くなった後に作られた頁から伝わるニュアンスの違いについては熟慮の余地がある。日本の報道系の記事の扱いで起きる揺れの多くは，事実，売上，介入する力（社長・政治力・広告力など），時代の空気，のどこを重視するのか，の違いから生まれている。

・時代背景の影響を受ける

筆者は，日宇氏の組み写真のニュアンスのゆれは，時代の影響が強いと考えている。日本の戦争に関連する報道を読み解くときに，時代背景，特に政治的時代背景は常に考慮の軸に置くべきことである。1965年，米国の海兵隊がダナンに上陸し，北ベトナム爆撃が始まった。

1965年は日本の報道にとって，挫折とも事件ともいうべき68年の政府による報道業界の人事介入の序章となる，大きな転換の始まりの年だと筆者は考えている。本格的なグロバール・スタンダードとしての映像ジャーナリズムが開花し，しかしそこが限界でもあった，と思われる年である。かいつまんで65年の報道業界の動向を記せば，次のようになる[19]。

65年１月４日に毎日新聞が「泥と炎のインドシナ」の連載を，大森実外報部長の主導で始める。

２月には朝日新聞の笠信太郎が，日本政府に対して米国政府に政策転換を促すよう提言し，同年３月５日に岡村昭彦の写真集が刊行され注目された[20]。３月30日にはサイゴンにある米国大使館が爆破され，テレビニュースが米国民に戦場の血生臭さをいきなり伝え，アメリカ国内に動揺が走った。日本では４月24日にベ平連（ベトナムに平和を!市民連合）の初めてのデモが行われた。米兵のなかの良心的兵役拒否者も支援するベ平連を通して，戦闘態勢を強めていく米国との安保同盟が何を意味するのかに日本の人びとが気づき，大きなうねりが生まれた時期である。５月９日に NTV で，「ノンフィクション劇場　南ベトナム海兵大隊戦記―1965年乾季の中部戦線」が放映された。米国が支援する南ベトナム海兵大隊に従軍した石川文洋カメラマンと，部分的に同行した牛山純一プロデューサーが制作した三部作の第一部で，同じ民族が殺しあう戦場となった村の前線の日常を伝えてきた。しかし，放送予定だった二部・三部は放送されなかった。茶の間に近い放送メディアにはふさわしくないとの自主規制の体裁がとられたが，政治の意向を受けた経営者判断があり，日本のテレビジャーナリズム史における事件となった。続く８月14日には，東京12チャンネルが「戦争と平和を考える」徹夜討論会を放映していたが，途中で打ち切りとなった。

まさにこの時期に，日宇氏の特集がでている。『アサヒカメラ』８月号が，長崎の記録写真特集を組み，日宇氏が16年間しまいこんでいたネガを世にふたたび引き出すことになったのは必然であったように思う。同年10月５日には，ライシャワー駐日米国大使が，朝日新聞・毎日新聞の記者を名指しで偏向非難するコメントを発した。日本国内の反戦ムードを抑えるための，本国からの要請によるものだった。米政府・日本政府の有形無形の圧力の中で，日本の報道業界の経営陣の変節があらわになり，68年４月をピークとして数年のうちに毎日新聞社の大森実外報部長や TBS の田英夫キャスターほか，読者・視聴者の大きな賛同の追い風を受けた報道業界の先鋭たちが職場を去った。

３－４．身元判明を牽引した読売新聞大阪社会部・黒田清社会部長・1982年８月

読売新聞大阪本社社会部は，1977年から84年まで毎年夏に大阪・心斎橋の大丸百貨店で「戦争展」を8回行った。黒田清社会部長の主導のもとで，紙面づくりで培ってきた記者と市民のつながりを最大限に生かした夏限定のイベントだった。

第６回（1982年８月）の「戦争展」に，釜墓地に保存されていた米軍の手によるご遺体やご遺骨の名簿のコピーが展示され，展示が終わる前日の紙面でも伝えられた。記事を書き，名簿を展示したのは，＜戦争＞取材班の塩雅晴記者だった。新聞記事で釜墓地のことを初めて知った遺族たちが，身内の所在の問い合わせをにわかに始めた。記事が出てから会期中の二日間に来場・電話合わせて約200人が問い合わせ，３人の身元が判明した[21]。

これに先立ち社会部では，遺骨の行方を厚生省に照会していた。厚生省の公式見解とは異なり，

---

[19] 拙稿「ジャーナリズムと映像　消去の事例：「南ベトナム海兵大隊戦記」放送中止事件・再考」『ジャーナリズム＆メディア　４号』（日本大学新聞学研究所，2011年，197－219頁）

[20]『これがベトナム戦争だ　岡村昭彦写真集』岡村昭彦，毎日新聞社，1965年

その後の関係遺族らへの追跡調査によって，遺骨の多くは遺族のもとに返還されていないと報じている。塩記者は83年４月に，釜墓地を長年ひとりで守ってきた芳林英樹住職から，火葬の現場担当者が荼毘に付したあと遺骨を一か所に集めて葬ってしまったと話していた，と聞かされている[22]。

同紙西部本社福岡総局の板橋旺爾記者も釜墓地の遺骨の行方を調査していた。同紙の斎藤喬記者は，1979年のフィリピン島慰霊団で新美彰さんと同行になり[23]，それが縁で80年の第４回「戦争展」に，受賞したばかりの新美さんの彫像「母さん立ち上がって」が展示され，大きな共感を得た[24]。さまざまな記者やライターたちによる調査報道と，厚生省の立ち位置は平行線が続く。釜墓地戦没者護持会は，現在も遺族探しに協力し続けている。年に数件，問い合わせがあるという。

戦争展を企画・実行した黒田清氏は，52年に読売新聞が大阪に拠点を作る時の新卒採用１期で，76年から社会部長となった。銀行人質事件や警官汚職の告発，草民の声を拾い伝えるコラム「窓」など，黒田部長率いる大阪社会部はいくつもの高い評価を得る仕事を生み出している。やがて社内圧力のなかで社会部は解体され，黒田清氏は1987年１月に退社した。退職後はフリーのジャーナリストとしてミニコミ紙の発刊やコラムニスト，コメンテイターとなった。黒田氏と対立関係にあった東京読売の渡邊恒雄論説委員長（現，社長兼主筆）は，大阪と東京の社内統合を進めた。読売新聞は現在，全国紙の最大部数を維持する巨大新聞社となっている。

おわりに：再びの封印の前に

筆者がルソン島北部決戦の事例研究に取り組むことになったきっかけは，元法政大学総長・阿利莫二氏の著書『ルソン戦―死の谷』（岩波新書，1987年６月）にある。同書の編集を担当した元岩波書店の伊藤修氏は，筆者が2018年10月15日に戦後の出版事情の聞き取りで伺った国立の仕事場で，当時の出版事情を，次のように話して下さった。

「あの先生の考え方には，実に共感しましたね，フィリピン戦線については，いろんなデマみたいな形の報告があってね。人の肉を食ったとか，あそこでは人肉を食べるということが一般化していたという，どこの戦線でも。」「それもあの先生の話を聞くとね，非常によくわかるんですよ。いかにひどい戦争だったのか。兵隊たちがあの状況の中で，飢餓に襲われたら人間は当然こんな風になるだろうというようなことを，あの人はちょっと一歩引きながらも，読者に想像させる。はっきり書かないことで読者の足をそこで止めさせずに，それはどういうことで起こったのかという，戦争が持つ性格の方にすっと集約する形で見事に表現しているんですよね」

---

[21]『新聞記者が語りつぐ戦争18　フィリピン悲島』読売新聞大阪社会部編，読売新聞社，1983年，18頁。紙面での記事がベースになって書籍化しているが，新聞の地域面の記事は，書籍化することで全国メディアとなる。

[22] 同上，12頁

[23]『新聞記者が語りつぐ戦争13　南の碑』読売新聞大阪社会部編，読売新聞社，1982年，201頁

[24]『新聞が衰退するとき』黒田清，文藝春秋，1987年，128頁

伊藤修氏は1960年代から，岩波書店一筋にさまざまな媒体の編集を担当された。月刊誌『世界』の編集を皮切りに，『思想』編集部，近代日本思想体系，新古典体系，日本歴史講座といった大型のシリーズものを編集した後，新書に携わられた。阿利氏の書籍出版のきっかけは，法政大学法学部教授で日本政治史の専門家・故藤田省三氏からの強力な推薦だった。藤田氏は，学内雑誌『法政』に寄稿された阿利氏の論文「学徒出陣四十周年　ルソン島「死の谷」の終戦」（1983年10月号，2-12頁）を読み，伊藤氏に刊行を勧めた。伊藤氏が編集を担当した『ビルマ敗戦行記』（岩波新書，1982年）に対する理解と共感があったことによる，という話だった。

鶴見俊輔氏は阿利氏の書籍に対する書評の冒頭で，「このルソン戦の記録は，これを書くために著者に四十二年必要だったことを納得させる」と記している[25]。阿利氏自身は同書の序のなかで，「記録として残す気になったのは一〇年ほど前のことである。還らぬ同僚の消息を未だにもとめている遺族とその調査に苦労している友人に接したことが，そのきっかけであった」という。阿利氏は同書のあとがきで，「この手記もしょせん，私の体験でしかないだろう。しかしその中で，戦争そのものが非人間性，残虐性を求めるものであること，そして，日本軍が現地民などに示した残虐性が，実は自軍内部で，そして日本人同士でおこなわれていることと決して無縁でないことを，この目で確かめたつもりである」と記している。怖い一文である。

釜墓地の出来事の，来し方行く末の検証を続けるほどに，その怖さがよみがえってくる。阿利氏の書籍の行間には，たくさんの名もなき人びとの戦傷が刻まれている。それらは，過去を隠して生きざるを得ない生還者や遺族への配慮によって，文字化されなかった。しかし，行間にうずくまる人びとの姿は，自らの戦時体験や伊藤氏のような高い見識によって解読が可能であり，静かに社会で共有されていたものと思われる。これらの，なかったことにしてはいけない行間の人びとの姿を，私たちは見失いつつある。釜墓地に眠る人びとは，カンルバンで葬られ，釜墓地に再び葬られ，今，私たちによって三度葬られそうである。苦しみぬいた人びとを，闇に葬ってはなるまい。

釜墓地に眠る人びとの経験を伝えるはずの慰霊の場は，フィリピンにさまざまにある（**資料３**を参照）。フィリピン正規兵，フィリピン抗日ゲリラ，フィリピン市民，米兵，華僑市民，日本人・・・。それぞれに墓苑のスタイルは全く違う。誰のための何の慰霊碑なのか，という手掛かりが全くない，というのが日本墓苑に突出した特徴である。中野聡氏の優れた先行研究などを手掛かりに，さらなる読み解きが必要である。いずれ，こういった場からの追悼式のニュースばかりになる。過去の記録の行間を読む力，場を読み取る力がますます必要になる。何が起こるかを予想し，研究の場でもできる手立てを打つ必要がある。

本学社会学部棟の入り口に，不戦の泉，というモニュメントがある。泉の渦から浮き上がっているひとつひとつが，戦場で破壊された人間の顔面と思われる。ルソン島北部決戦の事例を扱い始めて２年が過ぎようとしている。４回目となる昨年秋のフィリピン現地調査を過ぎたあたりから，モニュメントの顔が，一人一人の生身の若者に見えてきて，社会学部棟に入るときにたびたび足をと

[25] 朝日新聞，1987年７月27日

られる。2018年９月のルソン島北部山岳地帯の調査のときに，バナウェのタムアン村を通りがかった。軒下から超高齢のイゴロットのおばあさんが顔をだして，サトウキビをくれた。日本人だよー，というと，そこの穴に４人日本兵が埋まっておる，と指さされた。凄い悪臭だったので土で塞いだ，といった。穴はないのでよくよく地面を見回すと，硬い土の大きな縁取りらしきものが地面にあった。

去る７月６日，法政大学社会学部の第27回「社学コロキアム」が開催された。「記憶と記録―東日本大震災・福島原子力発電所事故の経験を引き継ぐために―」という題だった。冒頭で，講演者の壽福眞美名誉教授が，ご自身の研究プロセスを３段階に分けて紹介された後，次のように話された。人は，私的・個別体験の色眼鏡を持っている。自分の色眼鏡の色を自覚するために，他人の体験がいる。他人の体験の世界を媒介にしてからでないと，自分の思想の確立には到達できない，というご主旨だった。昨今のマスメディア状況とジャーナリズムの関係を，すっきりと言語化出来ずにいた筆者にとって，まことに腑に落ちる表現だった。とても感動し深く感謝した。

なぜ情報ではなく，人を見る必要があるのだろうか。グローバル・スタンダードで高く評価されてきたジャーナリズムは，ある他者の横に立ってその人の視界にはいる風景や体験を共有し，その思いに近づこうとするものである事が多い。誰を，どうやって見る必要があるのか。その手本になるような記者の立ち位置・記録に至る手法・記録の内容が三位一体となって，高く評価されてきた。これは，ある他者の体験を媒介にして，人びとが自分の色眼鏡を自覚し，新たな自分の意見を生み出すきっかけになるような調査記録，と言い換えることができるように思う。

本稿で扱った事例の追悼式について，なぜ自衛隊が，釜墓地で，追悼式の前座で軍歌を演奏し，筆頭の来賓たちが自衛隊幹部なのか，６社はいた報道記者は，考えただろうか。新美さんは，1992年の第11回慰霊祭から始まった海上自衛隊佐世保音楽隊の参加に際し，「この釜墓地で軍歌を聴くことには耐えられない」と演奏途中に静かに立ち去った，という[26]。今年の記事を書いた記者が，これを知っていたら，記事の書き方は違ってきただろう。他者の体験を媒介にして，自らが気づかずにかけている色眼鏡に，記者は気づかねばならない。

ビッグデータ解析，テキストマイニング，デジタル時代のビジュアル・スキャニングなど，魅力的なアプローチと技術が次々と生まれている。それらを有効活用することで，これまで見えていなかった傾向性や原因をより広く把握できるようになっている。それらも駆使しつつ，しかし，もっとも困難に直面する他者の話に耳を傾ける基本動作が，取材の核心に必要なことはいつの時代にも変わらない。

戦争体験者の語りに頼れなくなった時，行間を読む力とともに，厳しい事実をセンセーショナルにならずに明示する新たな表現力も必要となる。それらをいかにして養うのか。ジャーナリズムを研究対象とする際の大きな課題である。日本の報道について，検証と解明が広範囲に必要である。解明するための方法が分かっていても手が回らないこともある。アプローチが分からないこともた

[26]『虹』1992年９月号，48頁

くさんある。それでもはっきりとわかっているのは，60年代・70年代，あるいは，かろうじて80年代に，語るべきことを語れるようにと，無名の人びとの背中にそっと手を添えることもできた日本の報道業界が，今，その逆の力をも発揮している，ということである。研究の場でやるべきことは多い。ご専門からのご指摘・ご助言をいただければ，誠に幸甚である。

※参考文献については，**資料４**を参照のこと。

■資料１　新美彰さん年表

（出典：　資料４でアンダーラインを引いた書籍から作成した。資料作成協力，木下実咲さん）

1917年７月15日　　熊本市内の酒問屋，熊野家の次女として生まれる

1935年　　熊本市立女学校を卒業

1943年５月　　宇品から２万トンの輸送船に乗って日本を発ち，マニラへ

９月５日　　金貨メリヤス社員・新美弘喜さんと結婚

1944年６月　　給料が350円，食費１日10円でもインフレで不足し，妊娠中なので上司の家に同居

７月24日　　フィリピン人ばかりの病院で，順子ちゃんを出産

９月21日　　戦艦大和がマニラ湾に入る

９月22日　　マニラで米軍機による空襲が始まる

10月　　夫を含むほとんどの会社員に召集令状がくる。夫から自決用のピストルを渡される

12月上旬　　領事館から最後の日本へ戻る船を出すとの通達を受ける

12月14日　　輸送船(鴨緑丸)に乗ったが空襲で動けず３日後に出港。米軍捕虜が船底に1000人，在留邦人の引き揚げ者が600人，戦死者の遺骨が2000柱安置されていた。出港後間もなく空襲にあい，オロンガッポに一時上陸する。沈没しなかった駆潜艦に乗り換え，マニラ市内に戻る

12月下旬　　領事館からの指示で，穀倉地帯のサンホセに強制疎開することになる。１週間分の食糧とわずかな着替えを持ちパコの駅へ集まる。入院のためマニラに戻ってきた夫と最後の再会

1945年

１月　　サンホセへ一時疎開　　空襲と食糧難。その後，兵隊がバヨンボンに移動し始める。一般邦人婦女子もトラックで移動し，バヨンボン・ボンハル周辺での自活生活が始まる（～6月まで）。領事館の指導で自活生活。マニラ在留邦人の老人，婦女子約2,000名を含め5，600名が，日向村・瑞穂村・高千穂村・大和村・朝日村で集団生活。フィリピン住民の多くは，強制疎開地への移動，または山へ避難した。新美さんは，瑞穂村に５カ月いた。四畳半ほどの畑見張り小屋（竹の柱と床，屋根はバナナの葉）に７家族16名で済む。金貨メリヤスの専務婦人の金沢さん（男子と女子）・タバコ組合長婦人の木川さん（男子３人）・バー・タツミの近藤タツミさん・ボタモチ屋の室本さん（女子３人）・永井夫人（３月に出産，キアンガンの教会で死亡）・料亭「さくら」の仲居の市川ふみさん（４月に出産）・新美彰さん（と順子ちゃん）での共同生活

２月４日　　帰国後に届いた「戦死公報」に記載されている夫の戦死日。所属はマニラ防衛臨時歩

兵第６中隊。場所はオロンガッポ。しかし，当時は知らない

４月　　バギオ地域にいた邦人約500名が，戦況の悪化による後退で，ボンハルに合流。さらに食糧難４月25日　　米軍が決戦場となったバレテ峠に至る。５月中旬に日本の守備隊はほぼ玉砕

５月末あたり　　配給は１日２個の小さいおにぎりのみ。副食物は各自調達。ミルクがないので，配給のおにぎりを口の中でノリにしてゼロ歳児の口に入れるが，日に日に痩せていく。白鉢巻をして軍刀を持った斬込隊が次々に出ていく。米兵が，ボンハルの里40キロ先まで来ており，人びとが次々に北部山岳地帯を目指して移動。順子ちゃん生後9〜10か月目。周りの邦人も兵士もみな栄養失調で半病人。個人個人で食糧調達し，みんなに隠れて食べる。順子ちゃんは骨と皮。座ることもできず，お乳が欲しくても泣きもしない。病人は置いていかれるようになる

６月初旬　　キアンガン方面に移動開始。夜，トラックでボンハルを出る。荷物は，毛布，小さな蚊帳，米，干肉，飯盒，水筒，順子の着替え，おしめと二括りの荷物，シャツ二枚と上着，毛糸のセーター，ズボンだけ。目的地の約15キロ手前付近で降ろされ，「夜が明けたら左側の竹藪の中に隠れ，夜になったら前進して目的地に向かって下さい」といわれる。ようやく，イゴロット族の家が10軒ほどあり，一般邦人婦女子が集合している部落にたどり着く。さらに，司令部を追って北部山岳地帯へ移動。途中で今まで持っていた食料を，目を離したすきに日本兵たちにすべて取られ，食べ物がなくなる。

キアンガン手前のセント・ドミンゴ峠のジグザグの坂道10キロ超え。急な坂道で，荷物と子供の両方を一緒に運べず。子供を置いて荷物を先に運ぼうとするが，子供は必死に膝を血だらけにしながら這い上がってこようとする。兵士の代車がそれをひき潰しそうになり，怒鳴られる。道端にたくさんの兵士や邦人母子の亡骸。3日もすると白骨化する。

キアンガンに着いたが，連日の空襲でフィリピンの人びとは山に逃げて誰もいない。兵隊がたくさんいる。一般邦人婦女子は3キロ先の光が丘に行くよう指示される。雑草を食べる。1日だけ配給があり，茶わん一杯の籾。数日後，さらに山奥のパクダンへ移動命令がでる。

６月中旬，パクダンに到着。籾の束10束の配給があった。５軒ほどのフィリピン人部落にあり，臼と杵を借りる。兵隊にどこに移動するのか聞くもわからず。方向が分からず歩き出す。途中で，山下大将と若い兵隊たちにすれ違う

７月以降，大多数の邦人はアシン渓谷へ移動。一部はホヨ渓谷に入る。新美さんはパクダンからプロイ山を越えてアシン河上流へ。アパリに流れているアシン河の上流に架けられている吊り橋付近で，背負った荷物が弦に引っかかって動けなくなり，兵隊に助けてもらう。細い崖っぷちの道なき道を，崖にへばりついて進む。足を滑らせて落ちていく人多数。でんでんむし，蛇，イナゴを食べる。順子ちゃんは籾殻，小石，泥の混じった米ぬかスープを美味しそうに飲む。体力が落ちうまく食料が取れないため，木陰に寝そべる。兵隊が山の奥でイゴロット族のおばあさんを殺して食った話が伝わってくる。イゴロット族の中に入り生活する日本人もいる

８月７日ごろ　　順子ちゃん，亡くなる。目を開けず，泡を噴き出して冷たくなった。曲がりくねった石ころの道を下におりて，アシン河の河原から石を拾い，また道を上り順子ちゃんの墓をき

れいにする。桃太郎の子守歌を唄う

8月15日以降，飢餓のむくみで腹がふくらんでくる。空襲がなく，米軍の落下傘ニュースで日本が降伏したと知る。日本軍から日本人全員に自決命令が出るが，在留邦人の反対でおさまる

8月25日ごろ　邦人婦女子は荷造りを始めて米軍に投降するために移動しようとするも，領事館に止められ10日以上待機。その間に，食糧がないため餓死していく人多数

9月5日　移動開始命令がでたが，立ち上がれずに1日延期し，パクダンの米軍の第一線基地へ行く。領事館から，米軍からもらったご飯とコーンビーフの配給がある

9月10日ごろ　キアンガン小学校で米軍に投降し，米軍第一線基地の318キロ地点まで，隊列から離れないように歩くよう命令され，移動する（イゴロット族の日本人に対する悪感情に備えるため）

9月20日　トラックでサンホセまで，そこから汽車でカルンバンの捕虜収容所へ移動する。敗戦を待たずして早々に捕虜になっていた日本人婦女子，朝鮮人・台湾人の婦女子，日本人とフィリピン人の混血児，日本人と結婚した外国人女性など，山に逃げなかった人100名ほどがキャンプにいて，山岳地帯から捕虜になった人たちを，憐みの目で眺めていた

9月頃　米軍のカンルバン捕虜収容所に入る。赤十字のキャンプで看護婦の手伝いをする

10月25日　カンルバンからマニラへ帰国のために移動

10月27日　マニラ港を出発（「乗り込んで二日目に出港」）

10月31日　鹿児島県加治木に到着（帰国後，戦中の出来事を書き留める）

12月1日，熊本に帰りつく。実家は空襲で焼けていた。母と妹が待つ家に帰る，一つ布団に互い違いに休むと，母が足をなでて，象の足みたいにざらざらしているといい，小さな声で妊娠しているのか，と聞いた。医者に行くとフィリピンでかかった病気もあることが分かり，二年間医者通いをした。思うように体が動かず，線路に落ちている石炭や山の枯れ木を拾って売る。石鹸の行商もする。妹は体が弱く療養していた。その後，喫茶店をやったり，占領軍相手のダンサーをして食いつないだ

1947年　駐留米軍家具修理工場に勤務，その後，酒屋の権利が残っていたので酒屋を始めた

1948年頃　生活が安定してくる。西村虚空師に虚鐸と彫愬を学ぶ

10月12日　夫の戦死公報が発令された

12月3日　遺骨を受領したが，箱を開けたら木の札しか入っていない

1954年　夫の母が亡くなる

1955年　彫像がチャーチル展でNHK賞受賞，1962年　熊本日日新聞初出品初入選，1963年　太平洋美術展初出品初入選

1968年　太平洋美術展九州賞受賞，1975年　熊本県美術展出品　努力賞受賞「母さん立ち上がって」（「イゴロット人に助けられている母と子」）→後に釜墓地に奉納された彫像

1976年8月　『わたしのフィリッピンものがたり』を自費出版

1977年　フィリピン慰霊の旅に元軍人や遺族とともに参加する。フィリピンでグスマンさんと出

会う

1979年　フィリピン慰霊の旅へ。順子ちゃんの墓を探すが見つからない。慰霊団の元兵士たちの軍歌を聞いてられず，離れたところで持参してき虚鐸を（長い尺八）を山に向かって吹く

1980年７月　『ルソンに消えた星：終末を見た女二人の敗走記』岡田梅子・新美彰，毎日新聞社，1980年。読売新聞夕刊（７月30日）で，彫像の「母さん立ち上がって」が表彰されて，熊本美術会の会員になったことが紹介される。（「どこからも注文がなく，ただあのフィリピンの戦場を形にしたいと思って制作した」『生きる』より）

1980年８月　読売新聞社大阪社会部主催の第４回戦争展で「母さん立ち上がって」の彫像を展示

1984年　フィリピン慰霊の旅へ。キアンガンに行き，山下将軍の降伏調印の場に行った

1987年12月５日～９日　東京都熊本銀座館で個展開催

1988年10月23日　テレビ局の取材で，阿蘇山をバックに虚鐸を吹く

1989年１月17日　釜墓地で虚鐸を吹く。第一回慰霊祭からずっと参加

４月　釜墓地に如比堂ができ，新美さんの彫像が置かれる

５月　如比堂除幕式

７月　慰霊祭，工房のある阿蘇町の戦死者三人が釜墓地に合葬されていることが判明した

1990年１月　『90年代を生きるために』（黒田清，教育資料出版会)に，「戦争と差別を考える連続講座」で講演した「わたしのフィリピン物語」（新美虚炎）の原稿を寄稿

1992年　「日本の海の音が聞える」の題でフィリピン戦場を彫刻で表現

５月　『「戦争と平和」市民の記録　1945年夏―フィリッピンの山の中で』日本図書センターを出版。（「機械の音が虫の声には聞こえず，車の軋む音は神経をいらだたせるだけ」）

８月10日，読売東京朝刊・書評「一般民衆の手記「『戦争と平和』市民の記録」「語り継ぐ戦争」の熱気伝わる」で紹介

1993年　『フィリピン戦逃避行：証言昭和史の断面』岩波ブックレットを出版。（92年８月24～26日に狂竹庵で吉見義明のインタビューをうけた）

ビデオ作品「わたしのフィリッピンものがたり」（20分，67枚の自作の絵，彫刻，写真）が「全日本ビデオコンテスト」で大島渚氏選の審査員特別賞を受賞

地元放送局のディレクターとともにルソン島へ慰霊（『順子ちゃんの戦場』より）

1994年２月14日，朝日夕刊・特集「「いま」を切り取る鋭い目　93年全日本ビデオコンテスト」で，「わたしのフィリピンものがたり」が審査員特別賞を受賞したことが紹介される

1995年５月27日　「RKK ラジオホール　聴こえますか，ナナイの子守歌」に出演。

1997年12月７日　読売西部朝刊・社会「〔サンデーひと舞台〕母の心伝える戦争絵本「遺産で出版して」/熊本の新美さん」（田上賢祐）

2002年11月６日　『順ちゃんの戦場』（東京図書出版会）を出版

11月25日，読売西部朝刊・熊北「〔旬の人〕フィリピンでの戦争体験を絵本にした彫刻家　新美彰

さん85＝熊本」

11月27日，毎日・熊本「戦争ってなんだろう　悲惨な体験つづり画文集に――熊本の新美虚炎さん/熊本」（西東靖博）で『順ちゃんの戦場』を紹介

12月７日，読売西部夕刊・夕社会「〔余響〕今度は戦争のない時代に生まれておいで　１歳と15日の生涯を絵本に」（田上賢祐）。『順ちゃんの戦場』の紹介

（その後の没年は調査中）

■資料２　『アサヒカメラ』1965年8月号特集：記録写真１　撮影・日宇弘海（日宇スタジオ）

日宇弘海氏による1949年の釜墓地での出来事の写真記録（出典：『アサヒカメラ』朝日新聞社，1965年８月号，43-60頁）。筆者は，弘海氏の三男・日宇寛記さんへ，19年６月17日にご自宅で聞き取りをさせていただいた。ここでは，紙面に掲載されている写真をスキャンして転記する。キャプションの「　」内は原文のまま。

▼日宇弘海（ひう・ひろみ）さん略歴

（以下の履歴は，2000年９月８日のメモ（2019年６月17日に日宇寛記さんのご自宅でいただいた資料）から作成した。この資料の末尾にメモ書きで，1999年８月15日，日宇功氏が荒木部長とあう，との走り書きあり。長崎原爆資料館への写真寄贈の相談で連絡を取り合ったものと思われる）

1910年　12月　福岡県山門郡で出生

1927年～1934年　福岡市の写真館にて写真技術の習得。この間，美術団体に属し油絵を学ぶ。

1935年　佐賀県伊万里市に「日宇写真館」を開業。

1943年　徴兵のために写真館を閉館する

1944年　復員後，佐世保市城間町（母方の実家）に家族全員移転

1945年～1950年　佐世保引揚援護局の嘱託カメラマンとして記録写真を撮る。この間，数回にわたり長崎へ行き，原爆投下後の記録写真を撮った（長崎原爆資料館に写真が提供されている）。

1953年～1970年　引揚援護局の跡地が警察予備隊―自衛隊の駐屯地となり，このなかの売店で「日宇スタジオ」を開設。

1968年　南風崎に日宇スタジオを開設

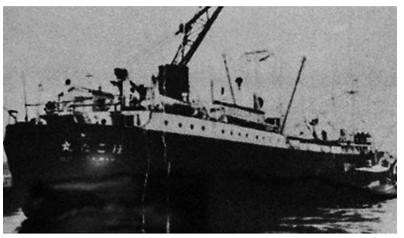
1973年　佐世保市南風崎の自宅で病死・享年63歳

▼記録写真『アサヒカメラ』（1965年8月号，初出）の写真構成とその内容

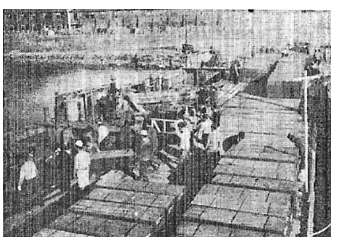
「　　」内の写真説明は，『アサヒカメラ』1965年８月号の特集依頼を編集部から受けた日宇弘海さんが語ったもの。日宇氏撮影であることは明記されている。以下，キャプションで（別冊）と記していないものは，全て『アサヒカメラ』から転記。（別冊）と書いてある「　」内は，1975年に発刊された『一億人の昭和史４　空襲・敗戦・引揚』（毎日新聞社，216-219頁）に掲載されたときのキャプションである。両雑誌の発刊には10年間の開きがある。

・「特集写真　作品　長崎の記録１　遺体帰還　日宇弘海」（43-60頁）

「（本文）　昭和24年１月９日，フィリピンの山中に戦没した日本軍将兵の遺体4823体が，輸送船ぼごだ丸に積まれて，九州佐世保港に還ってきた。当時，佐世保引揚援護局は長崎県東彼杵郡にあり，遺体は近くの赤子の浜に集められたが，遺族にはそのまま渡されず，火葬に付された。毎日120体ずつ処理され，火葬は約一ヶ月つづいた。写真は，援護局の嘱託だった日宇氏が記録したものである。」



（写真左）「野天に遺体を焼く」（写真中央）「（別冊）還送された遺体は4515体。遺骨は307柱。リストとの確認が慎重に行われた。遺体はマニラ郊外に，米軍の手で仮埋葬されていた」（写真右）「ボゴダ丸はもとドイツ商船，降伏後日本の引揚船になった」



（写真左）「49年１月９日，遺体を積んだボゴダ丸が佐世保港へ入港，クレーンで棺が団平船につみかえられた」（写真中央）「荷おろしに人夫は新しい草履をはいた」（写真右）「遺体の入った柩は，長さ約２メートル，函数549箱，早計重量54.9トンだった。ひとまず安置所に運ばれた」

（写真左）「緑色の柩の中には，内面銀紙の包装紙に一体ずつ包まれて，多いのは八体，少ないのは二体ぐらい，遺品，認識票が入り，そしてローマ字の名札がついていた。」（写真中央）「柩は積み重ねた薪の上に並べ，リストと遺体とを照合させ，約二〇体に一名の監視係がついた」（写真右）「埋められたマニラの土地は粗い白土だったと見えて，銀紙の白い輝きの中に現れた遺体から白い土が落ちた」

（写真左）「１月13日から火葬がはじまり，第一回は一〇箱，約八〇体の遺体が，野天火葬場で火葬に付された」（写真中央）「作業は二月一三日までつづいた。針生一帯は火葬の煙でくもった。骨拾いがすむころ，一日が暮れた」「（別冊）箱に収められた後の灰は，近くの景勝の地に集められ　供養塔ができた。異郷での戦いにたおれた人は，やっと故国の土に還った」（写真右）「やがて大村湾に夕日の沈むころ，作業員は遺骨を抱いて納骨堂に足を運んだ。」「（別冊）毎日120～160体の遺体が火葬された。切ない望郷の想いを胸に死んだ戦没者を想って，真冬の海辺の寒風の中，作業はつづけられた」

（写真）前掲『慟哭の釜墓地』からの抜粋。1949年当時の釜墓地周辺の様子（14頁）と名簿のコピー（13頁）

■資料３　ルソン戦に関連した慰霊の場　（写真資料の撮影，盧丹さん）

３－１　フィリピン市民のための戦災慰霊碑　「メモラーレマニラ1945年」（マニラ市内）

マニラ市街戦（1945年２月～３月）によるフィリピン市民10万人ともいわれる犠牲を悼む像が，マニラ市内の著名な観光地イントラムロスの一角にある。建立されたのは，1995年２月18日。台座には，金字で，以下のように刻まれている（2018年４月調査）。

・石板のメッセージ（訳出例・別府）

「**思い出―マニラ　1945年**　　この記念碑は，戦争のすべての罪なき犠牲者に捧げるものである。犠牲者の多くは，名もなく誰かに知られることもなく共同墓地に葬られ，あるいは葬られる事すらなかった者たちである。人びとの体は火に炙られ，瓦礫と化した建物の下敷きとなって砕け散り，埃まみれとなった。／この記念碑を，1945年２月３日から３月３日までに，マニラ解放の戦いにおいて殺された10万人を超える男性・女性・子供たち・乳幼児ひとりひとり，すべての墓石としよう。我々は彼らを忘れない，決して忘れてはいけない。／この街の聖なる大地の一部となって，安らかに眠り給え。私たちの愛するマニラ。」

３－２．自国の解放のために戦ったフィリピン兵の慰霊碑

以下の写真左は，マニラ市内にある戦没フィリピン兵の慰霊塔。石碑には，「”Here Lies a Pilipino Solder whose name is known only to god”（ここにフィリピン兵が眠る。彼らの名前は神のみぞ知る）と刻まれている。墓所の入り口は，24時間フィリピン兵が守っている。この他，フィリピン各地に戦没兵士の記念碑がある。以下の写真中央と右は，ラグナ州にあるパグサンハン抗日部隊の記念広場。

３－３　日本政府が1973年に建設した比島戦没者の碑

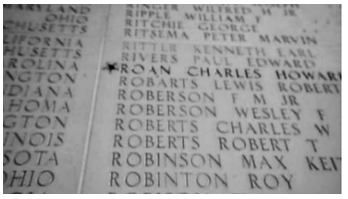
ラグナ湖を見下ろす山の中に日本の戦没者の墓苑がある。もともとは道もないジャングルだった。日本政府から相談を受けたフィリピン政府が，マニラ市内に記念墓苑を作ろうとしたが人びとの反対が大きく，住民のいないカリラヤの山中に道路を切り開いて整地したもの。石碑はなく「比島戦

没者の碑」「日本国政府　協力フィリピン共和国政府　３月26日」と読めるプレートがある。黒い台座の上に，白い布に包まれた遺骨箱をかたどったモニュメントがあり，後ろの壁の部分は畳をイメージしてつくられたもので，千鳥ヶ淵戦没者墓苑や沖縄戦没者慰霊碑の設計者である谷口吉郎の作。個人名は一つもなく，周辺の樹木の中に，植樹をした団体名や戦友会名などが記されている。何を慰霊する場なのかの，一切の説明がない。

３－４．米国兵士墓苑（フィリピン正規兵を含む）

マニラの高級住宅街の中にある米国墓苑。入口の石碑には，メキシコ戦争，第一次世界大戦，第二次世界大戦を通して戦没した米兵男女12万4909人の墓苑であると書かれている。

これらの人は，庭園内の広大な墓苑に整然とならぶ十字架の下に一人ずつ，名前・所属・戦没年月日が彫られている。宗教の違う人は，十字架とは異なる墓石の人もいる。行方不明者名を刻んだ石板の名前の横に赤金のマークがついているのは，後に行方が分かった人。星マークの人は，のちに称揚された人である。入口の左右の石塔には，以下のように刻まれている。（米国の息子たちが成し遂げた誇り高い想い出と，彼らの犠牲の謙虚な賛辞のために，この追悼の場はアメリカ合衆国によって創設された。1941-1945年）（祖国のために殉職し人知れずに眠りについたアメリカ人の名前を刻む）。



３－５　中華墓苑

マニラ市の北に隣接したエリアに大きなチャイナタウンがある。その一角に，中華墓苑がある。その中程に，抗日の記念追悼の場がある。記念碑の後ろには，２階建てのしっかりした造りの「比律賓華僑抗日紀念館」がある。10月にはここで戦没した烈士の慰霊祭が一カ月にわたって続けられるという。紀念館の中には，烈士となった人びとの顔写真がずらっと掲げられているのが窓越しに見える。建物の２階くらいまでの高さがある記念碑には，「比律賓華僑抗日烈士紀念碑」 と刻まれて，台座には，英語と中国語で戦時中の出来事が記述され，戦時の様子を伝える版画が３枚埋め込まれている。

■資料４　ルソン島北部決戦に関する記録本（出版年順）

以下は，本論で扱った事例検証のために必要な書籍を，年代順でリスト化したものである。本稿の研究対象は，45年を中心とするルソン島北部決戦において，語られにくい出来事の記録が，いつ頃表出したのか，その後の出版物でよく引用されている書籍はどれか，といったことについて観察している。そのために使用した書籍群である。ルソン島北部決戦を扱った書籍全般のリストではない。戦闘の作戦や兵士の勇ましい戦いぶりに重点がある書籍は，とくに文庫本などで多数出版されているが，リストに入れなかったものも多い。それらの書籍も，兵士の行軍の様子や場所の特定などにおいて参照している。しかし，本論で主題としている不可視化されやすい出来事，タブー化されている出来事の追跡においてはさほど重要でなかったことから，リストから省いてある。

例えば，『俘虜記』（大岡昇平，創元社，1949年）や『野火』（大岡昇平，創元社，1952年）といった小説は，事実として受け止められている側面も大きく，著名性も高いがリストから外し，実情の記録を実名で体験の範囲で残しているもの，あるいはそれに準じるものと，事実であることを信託されているマスメディア機関の記録を主軸としてリスト化している。

（＊印は，女性引揚者の体験のタブーを押し戻していった記録本の主だったもの。アンダーラインは本稿で記した新美彰さんの書籍や講演が収められている書籍，・は本稿でも言及している書籍である）。

➡1940年代

・『戦争一本　比島選挙区と必勝の構え』大本営海軍報道部長　栗原悦蔵，朝日時局新聞，1945年

➡1950年代

『比島戦記』日比慰霊会，秀英社，1958年

➡1960年代

・『俘虜記』大島六郎，弘文堂，1964年

・『山ゆかば草むす屍　比島に散華した同胞47万６千の遺族に捧ぐ』土谷直敏，1965年

『学徒出陣　海軍予備学生の記録』真継不二夫，朝日新聞社，1966年

『ラグナ湖の北　わたしの比島戦記』守屋正，理論社，1966年

・『アサヒカメラ』「記録写真　長崎の記録　日宇弘海」朝日新聞社，1965年８月号

『史説　山下奉文』児島襄，文藝春秋，1969年

➡1970年代

『外地に残る日本の戦歴〔中国満州・フィリピン編〕』毎日新聞社，1970年

・『ルソンの霧　見習士官敗残記』石田徳，朝日新聞社，1971年
『レイテ戦記』大岡昇平，中央公論社，1971年
『フィリピンの歴史』グレゴリオ・サイデ著，松橋達良訳，時事通信社，1973年
・『比島捕虜病院の記録』守屋正，金剛出版，1973年
『太平洋戦争下の都市生活　戦争と民衆』秋元律郎，学陽書房，1974年
・『一億人の昭和史４　空襲・敗戦・引揚げ』毎日新聞社，1975年
『ルソンの山々を這って―えせ姿三四郎』後藤利雄，1975年（未入手）
・＊『証言記録　従軍慰安婦・看護婦―戦場に生きた女の慟哭』広田和子編，新人物往来社，1975年
・『わたしのフィリッピンものがたり』にいみあや自費出版，1976年
＊『ルポルタージュ叢書４　民草としての決算書　皇后の股肱』千田夏光，晩聲社，1977年
・『一億人の昭和史　10　不許可写真史』，毎日新聞社，1977年
・『新聞記者が語りつぐ戦争５』読売新聞大阪社会部編，読売新聞社，1977年
・＊『処置と脱出　比島戦線死闘のかげに』大島六郎，牧野出版，1977年
『フィリピン戦線の人間群像』守屋正，勁草書房，1978年
『アシンの谷間に　南方第十二陸軍病院の記録』玉村一雄編，マニラ会，1978年（未入手）
『フィリピン民衆の歴史 全４巻揃＜フィリピン双書 8～12＞』レナト・コンスタンティーノ著 池端雪浦ほか訳，井村文化事業社，1978～1980年
『神を信ぜず』岩川隆，中央公論社，1978年
『戦争と宣伝技術者―報道技術研究会の記録』山名文夫＆今泉武治＆新井静一郎〔編〕，ダヴィッド社，1978年
・『フィリピンの激戦（ライフ第二次世界大戦史）』ラファエル・スタインバーグ，ライフタイム社，1979年
・＊『飯山達雄写真集３，遥かなる中国大陸写真集　敗戦・引揚げの慟哭』飯山達雄，図書刊行会，1979年
・＊『昭和史の記録　水子の譜――引き上げ孤児と犯された女たちの記録』上坪隆，現代史出版会，1979年
➡1980年
・『フィリピンの戦い（太平洋戦争写真史』佐久田繁，月刊沖縄社，1980年
・『ルソンに消えた星』岡田梅子・新美彰〔編〕，毎日新聞社，1980年
『別冊　一億人の昭和史　学徒出陣　日本の戦史別巻⑨　死と対決した青春の群像』牧野喜久男，毎日新聞社，1981年
・『戦時期日本の精神史』鶴見俊輔，岩波書店，1982年
・『新聞記者が語り継ぐ戦争18　フィリピン悲島　軍民50万人の飢餓と病の逃避行』読売新聞（大阪），読売新聞社，1983年

『共同研究・戦友会』高橋三朗＆溝部明男＆高橋由典＆伊藤公雄＆新田光子＆橋本満〔編著〕，田畑書店，1983年
・『狂気―ルソン住民虐殺の真相』友清高志，現代史出版会，1983年
『神聖国家日本とアジア―占領下の反日の原像』鈴木静夫＆横山真佳〔編〕，勁草書房，1984年
・『マッカーサーの新聞検閲―掲載禁止・削除になった新聞記事』高桑幸吉，読売新聞社，1984年
・＊『写真集　小さな引揚者』飯山達雄，草土文化，1985年
『戦野の詩　証言・比島作戦の綴り』村田三郎平，彩流社，1985年
『ホセ・P.ラウレル博士戦争回顧録 』ホセ・P.ラウレル著；山崎重武訳；ホセ・P.ラウレル博士戦争回顧録日本語版刊行委員会編，日本教育新聞社出版局，1987年
・『戦争とたたかう　憲法学者のルソン島戦場体験』久田栄正・水島朝穂，日本評論社，1987年
・『ルソン戦　死の谷』阿利莫二，岩波書店，1987年
『草の根のファシズム　＜新しい世界史⑦＞』吉見義明，東京大学出版会，1987年
『アジアの声　侵略戦争への告発』戦争犠牲者の声を心に刻む会，大阪東方出版，1987年
『アジアの声　侵略戦争の証言』戦争犠牲者の声を心に刻む会，東方出版，1988年
『タブナン：もう一つの太平洋戦争　米比ゲリラ軍VS日本軍の死闘』マヌエル・F・セグーラ著　大野芳訳，光人社，1988年
➡1990年
『日本はフィリピンで何をしたか』「アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ，心に刻む会」実行委員会，東方出版，1990年
『ワラン・ヒア　日本軍によるフィリピン住民虐殺の記録』石田甚太郎，現代書館，1990年
『フィリピン占領：聞き書き』上田敏明著，勁草書房，1990年
『アジア人の声 第4集 日本軍はフィリピンで何をしたか』今東成人著，東方出版，1990年
『ダバオ国の末裔たち：フィリピン日系棄民』天野洋一，風媒社，1990年
『講座・戦争と差別を考える　90年代を生きるために』黒田清編，教育史料出版会，1990年
『新聞記者が語り継ぐ戦争3　比島棉作部隊』読売新聞大阪本社社会部，新風書房，1991年
・『神軍の虐殺（インファンタ・ケース）：占領下フィリピンで何が起きたのか』川村悦郎，徳間書店，1991年
『「鬼兵団」ルソンに散る：ルソン戦記』大河内不朽［ほか］，光人社，1991年
・『ハポン：フィリピン日系人の長い戦後』大野俊，第三書館，1991年
『「戦争と平和」市民の記録1945年夏：フィリッピンの山の中で』岡田梅子・新美彰著，日本図書センター，1992年
『従軍慰安婦資料集』吉見義明編，大月書店，1992年
『証言　昭和史の断面　フィリピン戦　逃避行』新美彰・吉見義明，岩波ブックレット，1993年
『学徒出陣五十年』山下肇，岩波書店，1993年
『復刊曙光新聞：1975年11月-1993年11月：フィリピン戦線の記録と戦後の日比交流の歩み』曙光

新聞編集委員会編，彩流社，1993年
『南方軍政関係史料11 比島調査報告　第１巻』比島調査委員会編　解説中野聡，早瀬晋三，寺田勇文，龍渓書渓，1993年
『踏みにじられた南の島：レイテ・フィリピン』NHK取材班編，角川書店，1994年
『日本のフィリピン占領：インタビュー記録 』日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編，龍渓書舎，1994年
『マニラ新聞，私の始末記』青山広志，早稲田速記記録事業部，1994年
『わだつみ　不戦の誓い』大南正瑛・加藤周一，岩波書店，1994年
『1945年　マニラ新聞　ある毎日新聞記者の終章』南條岳彦，草思社，1995年
『神風特攻隊「ゼロ号」の男』大野芳，光人社，1995年
・『ある日本軍「慰安婦」の回想 フィリピンの現代史を生きて』マリア・ロサ・L・ヘンソン，岩波書店，1995年
『フィリピンの日本軍「慰安婦」 性的暴力の被害者たち』フィリピン「従軍慰安婦」補償請求裁判弁護団編，明石書店，1995年
『日本占領下のフィリピン』池端雪浦，岩波書店，1996年
『フィリピン残留日本人調査報告書』 編集，フィリピン残留日本人特別調査委員会/発行所，外務省，1995年
『モンテンルパの夜明け』新井恵美子，潮出版社，1996年
『回想の阿利莫二』編集発行・阿利莫二追想集刊行委員会，編集委員・岡田彰＆松野光伸＆武藤博己〔編〕，＜頒布問合せ先＞公人社　1996年
『母と子で見る　フィリピン残留日系人』鈴木賢士（写真と文），草の根出版会，1997年
『太平洋戦争の終結―アジア・太平洋の戦後形成―』細谷千博・入江昭・後藤乾一・波多野澄雄〔編〕，柏書房株式会社，1997年
『観光コースでない　フィリピン　―歴史と現在・日本との関係史』大野俊，高文研，1997年
・『戦争と罪責』野田正彰，岩波書店，1998年
➡2000年
『竹内浩三全編作品集　日本が見えない　全１巻』竹内浩三，藤原書店，2001年
・『海外引揚関係資料集成（国内編10）「局史上巻」「局史下巻」（佐世保引揚援護局）』佐世保引揚援護局情報係，佐世保引揚援護局発行（非売品），ゆまに書房，2001年復刻版
・『順ちゃんの戦争』新美虚炎，東京図書出版会，2002年
『ルソン島戦場の記録　たたかいと飢えの中を生きて』沢田猛，岩波書店，2003年
『フィリピン敗走記』石長真華，光人社，2003年
『学ぶこと，思うこと』加藤周一，岩波書店，2003年
『モンテンルパの夜はふけて　気骨の女・渡辺はま子の生涯』中田整一，日本放送出版協会，2004年

『BC級戦犯裁判』林博史，岩波新書，2005年
『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』森村敏己編；荒又美陽 ほか，旬報社，2006年
『アジアでどんな戦争があったのか　戦跡をたどる旅』別府三奈子，めこん，2006年
『ルソン島・野戦病院全滅の記　鉄兵団・バレテ峠・死の彷徨』西井弘之，文芸社，2007年
『何があったのか！？　フィリピン・日本占領下』江藤善章，新読書社，2007年
『言葉と戦車を見すえて　加藤周一が考えつづけてきたこと』加藤周一〔著〕小森陽一＆成田龍一〔編〕，筑摩書房，2009年
『マカピリ哀歌：太平洋戦争フィリピン戦線実録比島派遣第14方面軍司令部特別工作隊顛末』岩村高志，生杉佳弘，2009年
➡2010年
『歴史群像シリーズ，決定版　太平洋戦争７　比島決戦　フィリピンをめぐる陸海空の死闘』，学研パブリッシング，2010年
『「戦争経験」の戦後史―語られた体験/証言/記憶　戦争の経験を問う』成田龍一，岩波書店，2010年
『アジア遊学145　帝国崩壊とひとの再移動　引揚，送還，そして残留』蘭信三，晩成出版，2011年
『戦友会研究ノート』戦友会研究会・伊藤公雄・植野真澄・河野仁・島田真杉・高橋三郎・高橋由典・新田光子・溝部明男・吉田純〔著〕，青弓社，2012年
『フィリピン近現代史のなかの日本人：植民地社会の形成と移民・商品』早瀬晋三，東京大学出版会，2012年
『東南アジア占領と日本人―帝国・日本の解体　戦争の経験を問う』中野聡，岩波書店，2012年
『ルソン島・バレテ峠の真実：最も凄惨なフィリピン戦最後の戦場で起こったこと』和田昇，文芸社，2012年
『フィリピンBC級戦犯裁判』永井均著，講談社，2013年
『海外戦没者の戦後史　遺骨帰還と慰霊』浜井和史，吉川弘文館，2014年
『戦争と外邦図　地図で読むフィリピンの戦い』菊地正浩，草思社，2014年
『激闘ルソン島戦記　機関銃中隊の決死行』 井口光雄著，潮書房光人社，2014年
『ビデオ・メッセージでむすぶアジアと日本：わたしがやってきた戦争のつたえ方』神直子著，梨の木舎，2015年
・『戦場体験者　沈黙の記録』保阪正康，筑摩書房，2015年
『「ニッポンゴ」 戦勝国・大日本帝国が南方で発行した原住民への「日本語教化政策」新聞』福山琢磨，新風書房，2015年
『日の丸が島々を席巻した日々 フィリピン人の記憶と省察』レナト・コンスタンティーノ著水藤眞樹太訳，柘植書房新社，2015年
『写真集　フィリピン残留日本人』船尾修，冬青社，2015年

『フィリピン戦跡ガイド　戦争犠牲者への追悼の旅』小西誠，社会批評社，2016年
『日本の戦争　BC 級戦犯　60年目の遺書』田原総一郎監修，田中日淳編，堀川恵子　聞き手，アスコム，2017年
・＊『語らなかった女たち　引揚者・70年の歩み』鈴木政子，本の泉社，2017年
『忘却の引揚げ史』泉靖一と二日市保養所』下川正晴，弦書房，2017年
・『法廷で裁かれる南洋戦・フィリピン戦〔訴状編〕―強いられた民間人玉砕の国家責任を問う―』瑞慶山茂，高文研，2018年